

325
302

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



325-302



以名撰錄

招澤祐然

正

7.7.18

內交

はしがき

拙僧が餘儀なく高座上の人となりたは日露戦役のすんだ翌年である。其後本山の御用を三年ばかり勤めた外は、専心一意に勸説して來た其儘を、寫生的に法藏誌上へ連載し、自己の不學と秃筆とを公開して仕まふたのがこの『以名挿物録』である。序辨結辨更に一定の秩序もなき實になかしいものなれども、此度法藏館主の求めに應じて前編を開板することにした。幸ひに讀者が信順の因さはならずとも、疑訪の縁となることが出來たらなによりである。

大正七年初夏

松澤祐然

以名攝物錄前編目次

○	讚題	一
一	彌陀は御助け商賣なり	四
二	御助けを貰ふたが信心なり	一〇
三	受け心の詮議は無要	一五
四	受心と受けた品	一七
五	受心は千差萬別	二三
六	信心詮論の所詮	二九
七	受心と信の一念	三五

目次

八 受心は受た品に影響せず……………三九

九 戴く品は六字の呼聲……………四三

一〇 六字は相談の文句に非ず……………五三

一一 相談しても結果は不明……………六二

一二 名體不離……………七〇

一三 名體不二……………八四

一四 拜む佛と聞ゆる佛……………九一

一五 頼む佛は何れ……………一〇〇

一六 證誠は六字なり……………一一二

一七 廻向は六字なり……………一二二

一八 攝取は六字なり……………一三三

一九 光明は六字なり……………一四五

二〇 信心は切符である歟……………一五四

二一 切符を持つて乗後れ……………一六〇

二二 切符持たずに飛乗り……………一六四

二三 切符は狂人の沙汰……………一六九

二四 乗込んだが南無……………一七五

二五 乗せられたが他力……………一八〇

二六 呼ばふてのせ給ふ……………一八六

二七 呼聲と船……………一九二

二八 弘誓の船と港……………一九七

二九 断りが遅いと佛になるぞ……………二〇〇

三〇 乗せられた信相……………二〇一

三一 乗込んだ機相……………二〇七

三二 此世へ出るには……………二一四

三三 佛になるには……………二二一

三四 網にすぎる譬……………二二八

三五 網にすぎるは半自力……………二三四

三六 唯信鈔の取捨……………二五一

三七 攝取の網が純他力……………二五八

三八 網派と繩派……………二六四

三九 寝て居ては網にかゝらぬ……………二七一

四〇 網相と信相……………二七七

四一 信體と信相……………二八七

四二 他力の御手……………二九五

四三 鎮西の四字尊號……………三〇六

四四	真宗の六字尊號……………	三二三
四五	御助けの在處が違ふ……………	三二九
四六	保つ所の佛智を募れ……………	三三九
四七	鼠小僧の假諭……………	三四七
四八	力なくして往生……………	三五七
四九	聖人求道の徑路……………	三六五
五〇	六字に満足せる實話……………	三八二
	附録 六字親様の歌……………	四二一
	以上……………	

以名攝物錄 前編

松澤祐然述



讚題

一流安心ノ體トイフ事

南無阿彌陀佛ノ六字ノスガタナリトシルベシ。コノ六字ヲ

善願大師釋シテイハク。言南無者即是歸命亦是發願廻向之義

言阿彌陀佛者即是其行以斯義故必得往生トイヘリ。マツ南無

トイフ二字ハ、スナハチ歸命トイフコ、ロナリ。歸命トイフハ、衆生ノ阿彌陀佛後生タスケタマヘ、トタノミタテマツルコ、ロナリ。マタ發願廻向トイフハ、タノムトコロノ衆生ヲ攝取シテスクヒタマフコ、ロナリ。コレスナハチ、ヤガテ阿彌陀佛ノ四字ノコ、ロナリ。サレバワレラゴトキノ、愚癡闇鈍ノ衆生ハ、ナニトコ、ロフモチ、マタ彌陀ヲバナニトタノムベキゾトイフ、ニ。モロ／＼ノ雜行ヲステ、一向一心ニ後生タスケタマヘト彌陀ヲタノメバ。決定極樂ニ往生スベキコト、サラニソノウタガヒアルベカラズ。コノユヘニ南無ノ二字ハ衆生ノ彌陀ヲタノム

機ノカタナリ。マタ阿彌陀佛ノ四字ハ、タノム衆生ヲタスケタマフカタノ法ナルガユヘニ、コレスナハチ機法一體ノ南無阿彌陀佛トマウスコ、ロナリ。コノ道理アルガユヘニ、ワレラ一切衆生ノ往生ノ體ハ、南無阿彌陀佛トキコエタリ。アナカシコアナカシコ。

明應七年四月日

一 彌陀は御助け商賣なり

何處へ行つても鳥の啼聲のかはらぬ如く淨土眞宗の御化導は何國の人が御話しを致しても別の話しがあるではない。十劫正覺の曉より血の垂る聲で呼んで下さる大悲招喚の御六字を御取次申すより外はありません。依つて只今讚題に供へた四帖目の十四通一流安心の體といふこと南無阿彌陀佛の六字のすがたなりとしるべしと仰せられた御文の御意に基いて是より御話しを致して見ませう。

全體淨土眞宗の信心安心といふはいと六ヶ敷いものでありませうか又は容易いものでありませうか。蓮如上人から承給はりてみると。『あら心得やすの安心やまたあらゆきやすの淨土や』と仰せられてあるからは誠に容易いことのやうに思はれますが併し。『信心をとるひとまれなれば淨土へはゆきやすくして人なし』と聞いてみると餘り易くは戴けぬものと見える。何故に心得安い安心が其様に戴く人が稀であるかといふに。第一は聞かせる人の不用意もあるでせうし又聞く人の角違ひから起ることかとも思はれますから。談る拙者も聞く皆

様も、何卒誠心誠意に、他力易行の御法を、味はふて戴きたいこと
であります。

そこで拙者は、只今思ひ切りた御話しを、一つして見たいので
あります。夫は何であるかといふに、世間一般の人々は、信心
を戴くつもり、信心を戴かせるつもりで、聞く人も、説く人も、爰を
先途と、御骨を折りに御座るやうにみえます。大體に於て夫
は間違ひのない話しかもしらねども。或意味に於て、大いなる
間違ひが、こゝら當りに起りては、をるまいかと考へらるゝので
あります。其譯は、先づ檀上におたちかゝりの阿彌陀如來様は、

五劫永劫の御苦勞で、爲衆開法藏と、淨土の店を、十劫の昔に、開い
て下されたは。皆様に御信心といふものを、與へてやりたいの、
安心を取らせたいのといふ、浮いた話しではなかりたはづ。何
んがためちやと尋ねて見れば、『たい我等一切衆生を、あながち
に、たすけたまはんがため、方便に、阿彌陀如來御身勞ありて』。
と仰せられてあれば。助かるまじき此私を、助けずばおかん
が彌陀の本願助けてやらうが、あなたの御相た。御助けより外
に御商賣のない、如來様でありてみれば。極樂淨土の店飾りは、
御助け専門の營業所とでも申さうか。つまり阿彌陀如來は、信

心屋ではありませぬ、御助屋と屋號をつけてよろしいので。本店が極樂で、支店が此御堂、いかにも妙な商賣もありたもので、米屋、酒屋、呉服屋、御助屋。御助屋などいふ御商賣は、阿彌陀如來に限る御商賣であるが。其かはり、御助け商賣と看板出した上は、いかなる悪人でも、女人でも助けて下さるゝので、而も助け損なふやうな間違ひのない、大丈夫の御助屋であります。然るに、其御助け專賣所の支店たる此御堂へ、御出下された御客様の彼方方が、取急いで御助けを戴いて下さらずして、信心が取りたいの、安心がほしいのと望んで御座りては。恰も米屋

の店へ反物買ひに来たやうな形ちで、大間違ひのことであります。そこで今日御集りの御方のうちに、御助けに目をつけず、先づ信心がとりたいと思つて御座る、御客様がありましたら。其御客様に早速御歸りを願ひたいので。店が違ひますよ。信心屋ではありませぬ、御助屋であります。拙者は其御助屋の手代ですから、御助けなら御取次をしませうが、心の商賣はいたしませぬ。信心などは、どうでもよいが、先づ助けて戴きたいといふ、御希望の御方は、眞に此座の正客であります。

二 御助けを貰ふたが信心なり

かくの如く御話しを進めてまゐりますと、皆様のうちには、定めて不審に堪へぬ御方があるでせう。成程御助けを戴くが肝要に違ひはないが、其御助けを戴くには、信心がなければ、助けてはもらはれまい。たのむ一念のとき、往生一定御助け治定ぢやもの、信心がなくては助かるわけにはゆかぬ。依つて祖師聖人は信心爲本の宗旨を開かせられ、代々の善知識は、たのむ一念のところ肝要と御勧め下さるゝ次第である。然るにその往生の

正因たる信心の方を擱きて御助けを戴くとは何事である。と、批難の聲が四方八方から出てくるでせう。其批難の聲を御出しなさるゝので、いよく其人が眞宗の正意に戻りて御座るところがわかります。夫は信心と御助けを二つにして、信心を貰ふてから、助けて戴くやうな料簡で。つまり信心と御助けを交換するやうに思ふて御座る證據である。其様な御考ひなら、淨土眞宗をおやめになりて、鎮西宗におなりなさるが、結構でありませう。鎮西宗では、心存助給の信心で、御助けを引付けることにかゝり果てゝゐる宗旨であります。

抑も淨土眞宗は。信心を貰ふてから、助けて戴く宗旨ではありません。丸の裸のこのまゝで、助けて戴いたことを信心決定したといふので。阿彌陀佛の御助けが、此機に届いた時を、南無歸命の信心と名けるのである。要するに信心といふものを、戴くのではありません。實は御助けを戴いたことを、信心戴いたといふのであります。世間には嫁を取りたくと申しますゆゑ。ほんとうに嫁をとりたのかと、拙者は事實調べてみました。全く嫁といふものを、とりたのではありません。何をとりたかと申せば、娘をとりたのです。嫁といふものは丸鬘結て亭

主のあるものゝことで。そんな亭主のあるものなら、遣るものもなし、貰ふことも出来るものではありません。拙者が幼年のとき、宮部和上の説教に、嫁がほしくば娘を探がせと云はれたことが、今に耳に残つてゐます。御助けの生娘を、煩惱の弊屋へ貰ひ受けた時、信心の嫁といはるゝので。拙者は爰の味はひを、委細に吞込んでもらひたいために。信心をとることをやめにして、御助けを戴いて下されと、申した譯であります。

皆様よ、心静かに考へて見て下さらぬか。是が一念の夫が後念のと面倒な御信心を戴かずとも。差當り阿彌陀如來様から、

助けて戴いて仕まふたら、何も要らぬではありませんか。其何
もいらぬやうに成つたところが、雑行雑修の捨たつた形ちでは
ありませんか。その御助けの届いたまゝが、世話なしにたのみ
ちからになる信相とあらはるゝ所で。その御助けは何處にあ
るかと思つて見れば。この六字の御名號が、願行具足機法一體
の、御助けの法でありたかど、心に届いた一念が、御助けを蒙つた
時ちやゆる。・流安心の信相は、機からせめだす品ではない。
心に届いた南無阿彌陀佛の六字の相が、安心の體にして。その
御助けの六字一つで、安堵の出來たありだけが口にくぼれて下

さるゝ。それが報謝の、大行なれば。煩惱に勝をとらせぬやう、
稱名念佛相續するが、後念の勤めと勵みたいことであります。

三 受け心の詮議は無要

引續いて御話しをさせて戴きますが。淨土眞宗は、御助けを
向ふにかざつておいて、頼むのではない。御助けを此方へ貰ひ
うけたまゝが、信心といふのである事は、大略御話しを致しまし
た。そこで、其御助けを受取つた受け心、貫心、落付きごゝろ安
堵のしぶり、といふところに、多くの人が難儀して。教ふる人も、

どう受けられた、どう落付いた、と受心に力を入れて勸めらるゝで。戴く人も信じぶりたのみぶりに苦心をして。何年聞いても安堵しかねて、御座る御方が世間に澤山あるやうに見受けらるゝ。是も何んぞの角違ひをしてゐるものに相違ないことである。

全體受心といふものは、其やうに面倒のいるものであらうか。稽古して心配して、漸々出来た心地なら、受心ではなくて、出し心といはねばならぬ。火に觸れば、熱やと思ふが受け心。砂糖をなめれば、甘いと思ふも受心。この熱やの思ひ、甘い思ひは、親

から何返も教へられたり、先生から幾度も直してもらふて、漸々出来る思ひではない。火に觸れば熱やの思ひは只起る、只起るのを自然といふ。自然が即ち他力である。然るに信心安心の問題になると。他力くといひながら、他力自然の形ちはなくて受心の吟味にかゝり、世話や心配のやまぬのは、たしかに自力の證據である。

四 受心と受けた品

そこで受心といふときは、必ず受けた品がなければならぬ品

が届けば受心は、たゞおこるべき筈である。依つて當流の信心安心といふは、南無阿彌陀佛の六字の相なりとしてみれば、受けた心地を信心といふのではなくて、届いた六字の働きをいふのである。貰ひ心で行くのではない、貰ふた品の御力で參るのちや。是に依りて何物にかゝはらず物を貰へば貰ひ心はあるに違ひない。品を受ければ、受心のあるは當り前である。その貰ひ心と、貰ふた品とを、分別して篤と味はふて見て下さい。

拙者の在所より京都まで百五十里の道中で、拙者が初めて上京したのは、十八歳の夏であつた。その上京と出掛るときに、

父上より二十圓の金を貰ひました。そこで貰つた品は二十圓貰ひ心はどうであつたと尋ねてみれば、貰ひ心は、いろいろの思ひがありました。先づ第一に難有いことよと思ふた。夫だけですか、まだありたよ。此金さへあれば、大丈夫京都へ行けると思ひ、又た親なればこそ與へて下されたとも思ふた。サア皆様、こゝで深く味はふて下され。まだ十七や十八の、二十歳にたらぬ小僧奴が。百五十里の長の道中。野にも寝ねば山にも泊らず。汽車や汽船や人車などで。足に土さへつけなくて。目出度く京都へ上つたのは、拙者が難有いと思ふたので上つ

たのか。大丈夫と思ふたので行かれたのか。こゝら當りは誰にもわかるどころでせう。貫ひ心はあるにもせよ、その思ひは一厘ぶりも道中の用には足つてはゐない、何で上つた何で行かれた。曰すでしれたことよ、貫ひ心で行つたぢやない。受けた心地に用事はない。一から十まで親の手元より譲り與へて下された、二十圓の金の力があつたればこそ、行かれたといふことは、實に明瞭のこととせう。

サア今は京都や大阪へゆく話しぢやない。生死の海を乗越つて、十萬億の向ふに御座る、花の都の御淨土へ參る話しぢや、行く

相談ぢや。何んで行かれる、何んで參れる。こちらで難有いと受けた思ひで行かるゝか。大丈夫と決定したので參れるか、受けた心地が往生の間には合ふまい。貫ふた味を詮議するには及ぶまい。參れる種は知れたことよ。一から十まで親様から、發願廻向とこの私へ。譲り與へて下された、二十圓の金ではない、紙幣ではない。たつた六字の名號が胸に届いてをればこそ。不足があるかこの六字、小言はいへまいこの名號。つまり六字で御座らぬぞ、安價い名號と思ふなよ。此六字の名號のうちには、無上甚深の功德利益の廣大なること、更にそのきはまりな

きものなり。彌陀の身代ありだけの光明無量の御利益も壽命無量の御利益も攝取の力も助ける手柄も活て用らく御六字が胸に届いてある上は。是が信心。是が御助け。南無も歸命も發願も此方から出す思ひでない。届いた六字の御助けに頼める力があればこそ。頼むまいぞといはれても頼む思ひはたゞおこる。起る思ひに用事はないが用事ないとして出さずにをれぬ。居れぬ筈ぢやよ頼める六字の主ぢやもの。六字一つのはたらきで、難行難修の世話もなく。助けたまへと頼まれて御恩一つの遺場なく。口へこぼるゝ念佛の數は多少にかゝはらず。

報謝の行のありだけが、自の行を行するのではなかつたはい。皆是他力の貰ひもの。貰ふた品でたゞ参り。たゞで参れる淨土なら。道中大事にこゝろがけ。到着までの日暮しは。王法仁義を大切に。邪見不法の怪我せぬやう。無事に此世を送りませう。

五 受心は千差萬別

不思議の御縁で御話しをつゞけさせて戴きますが、何分にも五十年や六十年の短い話しではありません。無量永劫の末ま

五 受心は千差萬別

でも助けて戴く一大事の御話しでありますから、幾重にも聴聞違ひのないやうに願ひます。ソコデ當流の信心安心といふは、何の六ヶ敷いことではない。所信所行の御助けの法が、我機に届いた形をば、能機能信と名くるので。一流安心の體は、受けた心地をいふのではなく、貫ふた六字の當體が、能機の信相である故に。是を受心と受けた品に分別すれば。受心の方ではない、受けた品を信心といふことは、仔細におわかりになりましたか。偕此上になほも聞いて戴かねばならぬのは。受けた品が同一でも、受心まで同じうなるものでない、といふ事を必ず忘れて

下さるな。世間の人々は同じ六字を戴けば、受けた心地まで同じ味になるやうに心得て。受けた心地の出合して、其心地ではいけないの、其思ひでは參れぬのと、妙なところに争ふて御座る御方が、澤山あるやうに見受けらるゝ。是が大いなる間違であります。

ソコデ今日皆様に對して拙者が、特別に染させた手拭を、一筋づゝ御土産として、差上るとしたところで。ほんとうに差上るのではありませんよ。マア差上たこと、貫ふたこと、して考へて見て下され。貫ふた品は同じ模様の手拭でも、皆様の貫ふた

心地まで同一に顯はるゝ譯はありますまい。是は結構な手拭知識より斯やうなものを戴くことは前後にもない。生涯大切にして仕まふて置かうと思ふ御方もあるであらう。是は今晚より風呂に用ひやうと思ふ御方もあらう。又は娘にやらうと思ふ人も使物にしやうと思ふ人もいろ／＼ある。中には御僧分から一同に手拭を下さるなどは怪しいこと、是は定めて飯粒で鯛釣主義で。こんなものを與へてをいて、法禮でも集める一策ではあるまいかと思ふ御方もないにも限らぬ。此貴ひ心まで同一にしやうと争ふても致方はない。『ドウヂヤおかみさん

今日の御座で貰ひましたか。』何を？』『手拭を！』『ハイ私も幸ひ参つて戴いて來ました。』『どう受けられましたか。』『ハイ尊き御方の下された手拭ぢやから大切に仕まふておこうと思ふてゐます。』『ソリヤおかみさん、そんな受けやうではいけません、仕まふておく位なら貰はぬも同様。』私は今夜から風呂に仕用はうと思ひました。』『ソリヤおやぢさん、夫ではあなた尊む思ひが更にない。仕用ふ位ならごの手拭でも同じこと、知識より戴いた品ならば、大切にしておく思ひでなければ濟みませんよ。』
 とこんな話しをしてゐたら、百年やつても、まどまりはつかぬ。

サア皆様方信心安心は受心のことぢやと勘違ひして、つまらぬ
 ところに争ふてをりませなんだか。夫では御助けに片寄すぎ
 る。夫では能機が強すぎる。是では法體におちいる。夫では意業の
 分際ぢやと。受けた心地に腰据て詮議に苦心をして見ても、生
 涯安堵決定の立場はしれません。そこで受けた心地の詮議を
 やめて、受けた品をば出合ふて御覧なさい。「おかみさん貴女は
 どんな手拭を貰ふた子」「ハイこういふ品です」「私もこれです」
 「皆さんが同じ品ですね」。同じ筈ぢやよ與へる手元で模様も
 生地も長さまでも揃ひに仕上た手拭ぢやもの貰ふた方に違ひ

のあらう道理はない。ソコデ貰ひ心の出合すれば、十人十色百
 人百色でも貰ふた品の出合すれば、十人一色百人一色更に違ふ
 ところはなない如く。受けた心地のだしあひやめて受けた品物
 を出して御覧。おかみさんの戴いた品も南無阿彌陀佛、おやぢ
 さんの戴いた品も南無阿彌陀佛。主人も家來も、愚者も學者も、
 喜ぶ人も喜ばぬ人も、稱へる人も稱へぬ人も。貰ふた形ちに隔
 てがありても、貰ふた品は同じ六字の御助け一つ。

六・信心評論の所詮

受けた心地を信心とするのが、定散諸機各別の自力の人の決着で。貫ふた心地にかゝはらず、受けた品物を信心と定めるのが、如来利他の信心に通入したるところにて。此邊の決着を、明かにして下されたが、御傳鈔上卷の第七段信心諍論の一段で御座いませう。聖信房や勢觀房は、貫ひ心でりきんで出て。善信房の、聖人の御信心と我信心と等しと申さるゝこといはれなし、なごかひとしかるべきと。ソコデ吾祖聖人は、なごかひとしと申さゝるべきや。なんで變りがあらうかや、其故は深智博覽にひとしからんと申さばこそ。まことにおほけなくもあらめ。

御師匠法然上人の、智恵や喜びの受け心と。此懈怠だらけの善信の、貫ふた心地が、同様ちやと申したることなら。夫こそ申譯のないことなれども、貫ふた品の信心にいたりては。一度他力信心のことほりをうけたまはりしよりこのかた、全く私なし。然れば御師匠の御信心も、他力より給はらせたまふ善信が信心も、他力なり。かるがゆるに、ひとしくしてかはるところは、決してないぞと。一步も引かぬ聖人の御決着は、貫ふた六字を信心としての御沙汰である。其時一間の陰にましくした御師匠の法然上人。正しく仰せられてのたまはく、信心のかはると申す

は、自力の信にとりてのことなり。智慧各別なるがゆゑに、信また各別なり。大人の貫ふた喜びと、小兒の貫ふた喜びと、智慧各別なるがゆゑに。受けた心地はまち／＼で、夫を信心と思ふのが、自力の人のいふことぢや。他力の信心は、善惡の凡夫ともに佛のかたより給はる信心なれば。源空が信心も、善信房の信心も、さらにかはるべからず、只一つなりとの御判決。全く吾祖聖人の勝となりたは、負た勝たの手柄話しをするのでない。受けた心地をあてにして、参るつもりにしてゐても。夫は定散各別の、自力の信でありて見りや。哀しや我が参らん御淨土へは、よ

も御参りは出来ぬゆゑ。受けた心地の相談やめて、貫ふた六字の御相が、如來利他の信心なれば。祖師聖人の御信心も、御座の我等の信心も、更に變りのあらばこそ。變らぬ筈よ彼尊より、揃ひに仕立て成就して、譲り與へて下された。六字一つは金剛不壞。變りごうしの私、が變らぬまことを戴いて。變らぬ淨土へ参れるも、變らぬ廻向の信力ぞと。知らせてやりたい計りにて。よく／＼心得らるべき事なりと云々。

七 受心と信の一念

段々と御話しを進めて参りますと。こゝで皆様が、そろそろ不審が出て来るでせう。成程信心といふは御助けの届いたことをいふので。その御助けが南無阿彌陀佛であるゆゑに。南無阿彌陀佛さへ届いてをれば、信心はいらぬとして見れば。雑行すて、彌陀をたのむといふ形ちもいらす。疑ひはれて安堵決定した相もなく、只だ六字ばかりでそれでよい。殊に信心は千差萬別といふときは、信心は丸で勝手次第ですむのか、といふ疑問が起るでせう。

サア爰をよく聞いて下さい。その信心といふのが、全く

こちらから出すのではなく。貰ふた手拭に模様もあれば活用もある如く。戴いた六字に、雑行すて、彌陀をたのむ模様もあり。たのむ衆生を助ける活用もあるゆゑに。信心は勝手次第どころかや、動かすべからざる、御改悔文の通りにあらはれて来るものである。併し夫が實際に、御助けが届かぬうちは、其信心のあらはるゝ道理はないゆゑに。こゝ暫らくのところ、其信心の御話しは御預りにしておいて。先づ御助けを戴くといふことに付いて、充分に御話しをさせてもらひませうが。何分信心を信心と思ふてゐて下さるゝ様なことでは、何處までも間違を

醸すことになりませぬぞ。

或安心の小冊誌に、某講師が同行に尋ねられた問答の中に。

『受心は間に合ふと思ふか、合はぬと思ふか。若間に合はぬとすれば、無念無想の安心になる。又間に合ふとすれば、意業自力におちいるが、如何心得てあるや』と尋ねられた。其時同行の答へに。『受心は間に合ひます。併し間に合はせる心は御座りませぬ』と申してある。問も答へもたゞ恐入るばかり。拙者は愚痴のおかげで、何んの話しか更にわかりません。受心が間に合ふとは、何んの間に合ふのか。淨土参りの間に合ふといふ

のか。若し受心が淨土参りの間に合ふものなら。金を貰ふた、貰ひ心が路銀になるか。然るに間に合はせる心はありませんとは、どうした逃口上である。現在間に合ふ受心がありながら、間に合はせる心がないとは。極樂参りを見合せにでもしたのか。又た受心が間に合はぬとすれば、無念無想になるとは、何たる可笑しい話である。受心を間に合はせずとも、受けた路銀の大金が懐中にありたら。いかな人でも、まさか無念無想になりてをれない譯でせう。皆様は此邊を何んと味はふて下さるか、御安心の話といふものは、こんな可笑しなわからん話し

で通るものでせうか。御話しは通りても心には通りますまい。無理に心に通しても、臨終は通れませぬ。是が何からこんなわからん話しが、出て来るかと尋ねて見ると。品物を受けずに、受心うけこころを起さうとするゆるゑに、面倒めんどうになるので。御助けを受けずに、信心しんじんを起しにかゝり、助けて貰はずに、頼みにせうとするから。受心の稽古けいこばかりに、生涯しやうがい難儀なんぎをせねばならぬ。御助け一つを確かに戴たかいて、大悲だいひの親様おやさまに抱だかれて仕まへば。貫もつひ心こころや、抱だかれ心に世話せわもなく、安堵あんず決定けつぎの信相しんさうは、自然しぜんに出来る。貫もつふた品の御六字ごりくじが、信心しんじんとなり、安心あんじんとなり。我等われら一切衆生いっせしゆじやうの、往生わうじやうの體

となるので。受けた心地こころぢは、信しんの一念いっぺんには、全く出し場だしばはないのであります。

八 受心は受た品に影響せず

ソコで受けた品しなさへたしかなら、受心うけこころには用事もちじのないことが、おわかりになりましたら。此上このうへにもう一つ聞いて戴たかきたいのは。受けた心地こころぢのよしあしは、決して受けた品しなに影響いんげいせぬものである、といふことを吞込のみこんで下くだされたい。是これを味あじはふて下くださらぬと、兎角まづ受けた心地こころぢの出来不出来できなで、信心しんじんまで變かるやうに心

八 受心は受た品に影響せず

配し。後念相續のよしあしで、一念の信心まで、どうかなるやうに考へて。遂には安心の立場まで、石動で来るやうになります。是は結構の手拭と思ふても、つまらぬ手拭と思ふても、夫は御勝手で、手拭其物には、少しも影響はありません。難有いと思ふたで、手拭が長くなるでもなし。難有く思はぬので、手拭が短くもなりはせぬ。併し手拭は、後念の用ひやうが粗末なら、早くいたんで仕まいます。御廻向の信心は、金剛堅固の六字であるから。戴いたこちらで、喜ぶと喜ぶまいと、逃もなさらす失もなさらす。後念に、澤山稱へやうと、又忘れどほしに致さうと。信

心の體には、更に影響せず、往生の問題には、實に無關係です。喜びのあるなし位は、さておいて。一度信心を戴いて仕まへば、爰で淨土參りが嫌になりても、仕方はない。妊んだ種なら産ねばならぬ、妊んだ力で産のおやない種、力で産れるのちや。我腹撫で、毎晩喜ぶ嫁さんも、復妊んだと困りて御座る奥さんも。思ひは互ひに違ひごも、生れることは一つこと。今日此座の皆さんが、耳の穴から心の底へ、聞へた六字は佛種。参りたからうと、かかるまいと、此方の勝手に自由はならぬ。宿りた種が正定業、生れるしかけは六字にある。忘れ通しに暮しても、生れる道は

はづされぬ。いやぢやおうちやの小言なく、生れにやならぬ御
手柄を。蓮如様から聞いて見りや。『いかに地獄へおちんと思
ふども。わがはからひにては、地獄にもおちずして。極樂に參
るべき身なるがゆるなり』。

かゝる手強い御手柄が、不思議の御縁で聞へて見りや。もう
參らせて貰ひたいの用事はすんで。參らにやならぬ身となれ
ば。參りそこねば出来もせず。參る此身は只身でない。懷妊
になりた人ならば。立居振舞無理せぬやう、寝起や食事の加減
まで。粗末があつては、腹の子にまで障ります。いま御互ひの

我々は、佛の種をやごした此身であつて見りや。家内眷屬無理
せぬやう、王法仁義のつとめぶり。欠目がありては、佛の顔にか
ゝはります。子供やごした御婦人は、十月の間つとめにやなら
ぬ。佛やごした我々は、十月に限りた勤めでない。老少不定と
あるうへは、今日が勤めの仕まひやら。明日が難儀のおはりや
ら。永いつとめと思はずに。陰や陽のへだてなく。念佛諸共
勤めおほせるが、眞佛弟子の行爲ひであります。

九 戴く品は六字の呼聲

毎度御話しを致しますが、何分出離解脱の大問題であります。ゆる。幾重にも聴聞の角違ひのないやうに願ひ度いことで。僅か五丁や三丁の近い停車場へ行くにしても。若し方角違ひをして歩行てをることでは、日暮までかゝりても、到着すること出来ません。今信心安心もその如く、後生大事と踏出して、聞く氣で聞けば、一座か二座の御化導で、戴き安い信心でも。大事の聴聞に角違ひがありては、娑婆五十年の日暮まで御参りしても、安堵決定の驛に達することは出来ません。併し、目に見える此世の方角なら、其様に間違ふ人もあるまいが。目に見えぬ間

題になると、現在親子夫婦の中でさへ、意外の考へ違ひをして、生涯を過つものは世間に澤山あるならひ。況んや、目に見えぬ未來の問題、信仰上の御話しは、猶更間違ひのあり安いは、理の當然でありますから。拙者の御話申す事柄に、御同心の出来かねる點がありましたら。御同朋御同行のおなさけとして、何卒開導を願ひたい事があります。

上來は眞宗安心の踏出しの方角に付いて。信心を戴いてから、助けて貰ふのでもなく、彌陀を頼んでから、救ふて貰ふのでもない。如來の御助けが、此機に届いたことを、信心といふので。

ツマリ遇無空過者の遇の字が眼目で。御助けに遇ふた形ちが、
雜行すて、彌陀をたのむ信相とあらはるゝのであります。其
信相といふも受け心をいふのではない、受けた六字の力用であ
るから。一流安心の體は、南無阿彌陀佛の六字の相にして。受
けた心地は、往生の用にはたゞぬ、受けた品さへたしかなら、受け
心は何んどあらうと、往生に仕損じのないことを、充分に御話し
を盡しました。依つて是よりは、いよゝゝ其信心を戴く、御助け
を受取る、といふ大切なる問題に付いて、御話しを進めたいので
あります。

抑も、阿彌陀如來の親様より、我々の手元へ與へて下さるゝ品
物は、幾何あるでせうか。元より彼尊の御手元には、光明もあり、
壽命もあり。功德もあり、善根もあり、因位の萬行、果地の萬德、實
に無量無邊の品物であります。正しく我等衆生が、取引をす
る場合になると。六字の名號の外に、一物もないのであります。
そこで、今日皆様方が、此六字の名號を戴いて、おしまひになれば、
彌陀の身代の譲り渡しが済んだので。夫が信心決定でありま
すが。餘り早く御渡し仕てしまふては、説教商賣の拙者の、仕事
が盡きるやうな氣持もしますが。併し如來様は、一日も早く與

へてやりたい貫ふてくれよと随分おせきなされてありますから。御參詣の皆様方も早速に此名號を貫ふて御歸りを願へたい次第である。

然らば其名號を戴くには如何して貫ふのであるかといふ御尋ねが出ませうが。夫は少し早まりた御尋ねで貫ふ工面をする前に戴く品を篤と吟味せねばなりません。なせなれば戴く品の了解ぬうちに戴きやうの解る道理はない。而も戴く品に依りて戴きやうが違ふて來ますので。酒でありたら徳利で受取る、牡丹餅ならば重箱で受取る如く。徳利で牡丹餅を受取る

ことは出来ません。今阿彌陀如來より我々へ發願廻向と與へて下さるゝ御名號といふは。酒のやうな品であるか、牡丹餅のやうな品であるか、皆様は御存知でありますか。滑稽話しではありませんよ、今は夫を戴いて、淨土へ參らうといふ大問題でありますぞ。戴く品も解らずに、受取らうとかゝるゆゑに。用事もない受心の詮議計りしてゐるやうな間違が起りて來るのであります。

そこで六字の名號といふは、如何なる品かと尋ねて見ると。いふまでもなく、我等が未來の親様の御名前であります。全體

名前といふものは如何なる品かと問はれたら皆様は何んど御答へになりますか。彼方方も名々に御名前は持て御座る筈である。名前を持たぬ御方は一人もありませんまいが。サアその名前といふものは如何なる實質であるか。赤いものか白いものか長いものか短いものか堅いものか柔かなるものか考へて御覽。ウツカリしてゐると自分に持てゐる名前の實質も知らずに御座る御方もありますが。こゝは曇鸞大師に御尋ねすると、早解りであります。曇鸞大師は論註の中に『讚嘆は口にあらざればのべられず』と仰せられて。聲名句文といふが性相の

きまりですから。名は聲なり、聲の屈曲によりて顯はるゝが、名といふものである。然れば何物の名前でも、口から聲立て述顯はすといふより外に名の實質はないのであります。かく申したら皆様のうちに、名前は聲でなくとも文字で顯はさるゝと、迂濶の議論をなさる御方もありませんが。文字は聲の符牒である。文字の實質は聲の外にないのであるから。名前といふものも、口より顯はるゝ、聲の外に一物もない事と、御決着を願へたい。然らば阿彌陀如來の御名前も、其元を尋ねれば、西岸上の御呼聲。釋迦善知識の金口の說法。眞實報土の正因を、二尊のみこ

とにたまはるので。呼聲の外に名號なく名號は必ず呼聲として見れば受取る手元は忽ち定まります。下さる品が聲ならば、目で受取る品でもなく手で戴く品でもない。聞其名號と耳傾けて聞得るばかりで、信心歡喜と我物になり。乃至一念と時を隔てず、至心廻向の仕事はすんで、即得往生の大益を。住不退轉と即座に得らるゝ御手際が。六字にあるぞと聞かせて下さるゝが。願成就一實圓滿の眞教で。是が眞宗別途、超世不共の妙法であります。

一〇 六字は相談の文句に非ず

世には不思議のものゝ澤山あることで、火は物を焼く、水は物を濕す。蒸氣の力量、電氣の活用など、誠に不思議のやうですが、併しよく考へて見れば、随分理屈の解らぬこともありませぬ。然るに音聲法の御六字で、造悪不善の我々が佛になるといふは、實に靈妙不思議のことで。是が虚偽でないと思つてみれば、誠に腰のぬけるほど難有いことではありませんか。『いつゝの不思議をどくなかに、佛法不思議にしくぞなき、佛法不思議といふ』

一〇 六字は相談の文句に非ず

ことは彌陀の弘誓になづけたり』不思議も不思議も大不思議。智慧第一の舍利弗も神通第一の目蓮も。彌陀の名號六字の不思議は實に量り識ることの出来ぬ不可稱不可說不可思議の名號なればこそ。十方の諸佛は口を揃へて是を讚嘆あそばされ。代々の善知識は、懇に是を御傳へ下さるゝので。戴く我等は世話もなく善知識の教へのまゝが御助けの大法なれば。よく聞くところにて往生の心行を獲得することのできる絶対希有の教へでありますから。當流に於ては善知識の御言葉を非常に尊崇して。如來の金言と戴き奉ることとは、他宗などには夢

にも知ることの出来ぬ味はひであります。

然るに此點に於て甚だしき間違ひの起り易い傾きのあります。すのは。かゝる尊き御六字を六字といへば無上寶珠の名號とも、大善大功德の總體ともいふて。いかにも寶物の如く尊まれ、往生の正因と戴かれるやうではあるが。サア此六字を頼むばかりで助けるの御呼聲ちやといはるゝと。忽ち意味が變更りて來て何ぞ如來様より我々へ相談でもかゝりて來た御言葉のやうに聞き誤り。是に對して衆生より御挨拶でも申し上げるか、承知でもせねばならぬやうな考へを起し。甚だしきに至り

ては「ハイ」と返事をするばかりなどといふ可笑しいことを申し傳へてゐる族もある。

成程彌陀と衆生と相談づくで往生が定まるものならば。返事も入らうし承知もせねばなるまいが。親が我子を助けるに、我子に相談をかける必要はあるまい。夫と同時に子供から返事をする必要もないわけである。然るに世間の人の中には、やゝもすると此六字の呼聲を相談の文句と心得誤りて。どう受けられたらう承知した、参りませうの、たしかな返事が出来るかと。受心や承知のしぶりに骨を折る。何年聞いても安堵がな

らぬの、確かな思ひになられぬのだ。難儀してをる人のあるのは、誠に哀れかなしき間違ひではあるまいか。

皆様よ、心静かに考へて見て下さい。可愛我兒がいま火の穴へ落るのに、親が其子を呼掛て。兒供が承知したから抱いてやる、兒供が返事せぬから、火の穴へ墮とすのといふ親が、此近邊に一人でもありませんか。若其様な親がありたなら、田舎におくは惜い事です。早速亞米利加へでも送りてやり、桑港の大博覽會に出すべしだ。さうすれば西洋の人々は、夫こそ驚いて。何んと珍らしい親が、日本から出品せられたと。歐洲諸國でも、

戦争を休んで見物に行くかもしれませぬ。皆様よ、こんなたはけた味はひが人間同士の親としても、露微塵あるべき譯はない筈ぢやに。かりそめにも、大の字付の御慈悲たる、大慈大悲の親様が、可愛衆生を助けるといふ場合に於て。先づ衆生を呼掛て、其衆生の返事や、受心を見てから助けるといふやうな、狂態じみた味はひが。卵の毛のさきでつく程も、あらう理屈は夢々ないことを、拙者は絶叫して止まないわけであります。

誠にこゝは一大事のところですから、よくよく吟味して下されませ。河に流れて溺れて沈むその人を、救ふ舟から呼掛て、其

溺れた人の、受心や安堵のしぶりを、見てから助けるといふ舟ならば。助け舟ではありません、ソレコン殺し舟と申さねばなりません。又小慈小悲の人間でも、自分より一段以下の蝶や蜻蛉を助けるにも。その蝶や蜻蛉が、助け人に對する心地などは、助ける手段の上は、兎も角も。助けるといふ、主義精神のうへには、聊か關係はありますまい。拙者は座敷の障子に迷ふてをる蜻蛉を、何度も助け見ましたが。拙者が助けやうとすれば、蜻蛉は反つて拙者を恐れて遁やうとします。夫を無理に捕へたところか、蜻蛉は拙者に喰付ました。拙者は蜻蛉のこれ位の愚かな

ることは素より見抜いてかゝりた仕事ですから。腹もたゝねば嫌ひもせず、自慢ぢやないが美事助けおほせてやりました。又人間以下の畜生としても、可愛我兒を助けるに。我兒に相談の返事の承知の受心のと。助ける条件のあるべき譯は更にない。こんな話しは幾個ならべても同じこと。然るに、五十二段も違ふて御座る親様が、虫蟻よりも比較にならぬ我々衆生を助けるに。呼んで衆生の返事を聞くの。振向く思ひを見届けるの。歡喜の思ひはごうでもいるの……と。ア、勿體なくて涙が出ます。大悲の親を馬鹿にするにも程がある。こんな話し

は止めにませう。そんな心得はやめて下さい。

然らば阿彌陀如來は、何んが爲に我々を呼んで下さるゝのぢや。こゝが肝要の聞きどころ、必ず聞き損じて下さるな。サア此呼んで下された六字の譯を善導大師釋していはく。南無といふは歸命なり、「亦是返事聞かんがためなり」。ソナナ御釋がどこにある。亦是發願廻向之義ぢや。返事聞ことて呼ぶのぢやない、與へてやること成就したのが六字の廻向。何を與へて下さるのぢや、與ふる品は卽是其行の御助け。承知さしよとて呼ぶのぢやない、助けたへとて立た六字の呼聲ぢや。聞こえた

六字が御助けの名なり體なり親様なり。心に届いた御六字が、御助けの法でありたかど。知れたまんまが世話いらす、承知も返事もあらばこそ頼みちからとなる計り。歡喜も報謝も稱名も、六字一つの力用で、不足のない身になりたのが、信決定の行者ゆへ。一流安心の信相は、此機に返事さすのでない。届いた六字の相であるぞ、と知らせて下されたが、只今議題の御文である。

一一 相談しても結果は不明

總て相談といふものは、何事にかゝはらず、必ず夫と實行が伴

なはねば、何んの功力のないものである。國會でも、縣會でも、市町村會でも。議員が何程の相談をきめても、實行することが出来ぬならば。所謂小田原評議といふものであります。是に依つて、事の大小を問はず、先手に出たる相談でも、後手に受た話しても、必ず三つの要素が揃はねば、何んの用事は足らぬもので。『何ちやお婆さん朝から居眠をしてゐるね、幸ひ金米糖が袂にある、是を遣りませうか』。是が些細のことなれども、相談の出しである。そこで婆さんが入りませぬと断りて、仕まひば話しは無茶になるが、『夫は御親切に、どうしたことか眠氣がさして困

ります、左様なら金米糖を戴かして下されませ。是が相談の受けといふものである。そこでこの出しと受けとの二つにて、相談は決りたが、是丈では用事が足らぬ。必ず第三に實行といふて、其金米糖を受取りて、口の中へ入て仕まはねば眠氣は醒ぬ。是を會議などの法からいふと、原案と決議と、施行といふものである。金銭問題でいふて見ると、『檀那様恐入るが五十圓の御貸付を願ひます』。是が話しの出しである『貸してやるぞ』。の返事が相談の受け。此二つで相談は決まりたが。いよく五十圓の耳を揃へて渡して下さるゝ、結果の一つが缺てゐては、借

金拂ひの間には合はぬ。是は田地の賣買にしても、嫁聲の遣取にしても同じことであります。

そこで今、阿彌陀如來の我を一心にたのため必ず救ふべしと、先手かけての呼聲を聞いて。是を相談の出しと心得て、我々は其相談相手になりて出で。座に座を重ねて聞かせて貰へば、無理の仰せも更になく、難儀の話しでもないことで。罪はいかほどふかくとも、我をたのため、我に任せよの仰せぢやもの。いやぢやと冠り振らりやうか、虚ぢやと二の足踏まりやうか。かゝるものをも御助けとは、何んたる大悲の親様やら。左様ならば御助

け候へど、重ね返事で受けては見ても。出しと受けとの二つは揃ひ、相談は纏りてしまふたが。哀しや最後の結果として。汝はよくも我を頼んだ、爰で助けてやりますその、實行が一つ缺てゐるので。高座のもとでは難有た涙で返事はしても。宅へ歸りて心静かに、出掛る未來と踏出て見ると。何となく物足ぬ思ひと淋しい心のたへぬものから。是ではまだ頼まれたのではなからうか、と頼む自力の手も引けず。何度たしかに頼んで見ても、落付かれぬので困りはて。此儘なりの御助けぢやもの、彼尊に間違ひのあるものか。法の手強い御手柄で、此機の世話

を片付て見てもごうやら氣濟が致しかね途方にくれて苦しんだり、無理におしつけて定めて見たり。行きつ戻りつの混雜は、安心どころか大心配の騒ぎで御座る。こんな騒ぎが何から起ると尋ねて見れば。彌陀と衆生と相談して定める後生と心得て、返事は確かにして見ても。最後の御助けに預かりたか、預からぬかの、大事の結果が生涯知れぬもの故に。決定の出来る道理はないのぢや。

是が聽聞になさけない程、方角違ひをしてゐるので。阿彌陀如來は、今更衆生にかける相談はない。衆生にかける相談は、五

劫の昔に濟である。五年や十年の話しと違ひ、五劫といふ長い間だ。我等がこゝろを目の前にかざり、縦から横から右から左から。何んぞ助ける縁はないかと、瞬きもせず此機に相談かけて下されたれど。參る機もなし行く機もない、強業難化の徒ものであつたればこそ。衆生相手に相談しては、五劫が十劫百劫千劫かゝつても、助ける道は纏らぬゆへ。衆生相手の相談やめて、遁よば遁れ、遁さぬ法を彌陀の手に成就して。與へて助けて無理やりにも、淨土まで引寄せせんばおかんぞと。兆載永劫の御修行で、目出度出來上りたが六字の呼聲。返事も相談も

いるのぢやない、今は眞實功德の取引を、實際にさせて戴くときである。仲立人は善知識下さる品は六字の寶。聞得る信の一念に、變らぬ六字の主となり。確かな返事は出さずとも、確かな親に抱かれて見れば。頼み力になりすぎて、此機ながめる用事のなくなりたのが。雜行捨て、彌陀を頼んだ相であります。サア此上は、後生に此機の返事はいらぬで。娑婆は此機に油断せず、親子兄弟機嫌よく。アイノノと返事して、下女や下男や他人にも。無理の言葉をつかはぬやう、此機を攻めて人を攻めず。目出度此世を送りてくれよが、眞俗二諦の御教化である。

一一 名體不離

『踏迷ふ道あだならでほとゝぎす』。アダラ山路をふみ迷ひ、哀しや一夜を山家に宿りしおかげにて。都城などには容易に聞けぬ不如歸を深く賞翫させて貰ふた樂みは。迷ふた道が却りて幸ひとなりた、といふ今の句の意であります。是は御互の一生にも、随分實例のあることで。壯年の時失敗したのが、生涯の樂となりて、老後は大に安樂に暮さるゝことのある如く。今一大事の後生にとつてもその通り。定散自力の奥山で、トント聴

聞を踏違ひ。受けた心地を信心と思ふたり、阿彌陀如來と相談して、コナラの返事で往生の定まるやうに心得て。永々難儀して来たところへ、本願招喚の呼聲の手強ひ六字が聞えてみれば。今迄迷ふた聞きやうも、皆是獲信の縁となりますから。聞きあかすまでは大事をかけて、聞く氣になりて戴きたい。

偕此度は、其名號六字の御手柄を、充分に御話し申すに付いて。先づ差當り、西方淨土に御座らせらるゝ御助けの人、即ち佛體と、今爰で聞かせて戴く御助けの法、即ち名號とが。いかなる關係を以て、御座るかといふことを、明了に聞いて戴きたいことであ

ります。全體淨土眞宗は名號を聞いて彌陀を頼んで、そして西方淨土の如來様が、方の如來様から助けて貰ふのではなく。西方淨土の如來様が、願も行も光明も壽命も。名號六字に成就して、是を衆生の心中に廻向して。この名號で抱いて助けて淨土まで送り届けて下さる。不捨の眞言稀有の勝法が南無阿彌陀佛の六字である。是を古來より名體不離の御六字と申し傳へてをりますが。此名體不離といふことを、世間の人の中には、丸で文字のまゝに讀んで仕まつて。名と體と離れぬことが名體不離と心得て。名があれば體がある、體があれば名がある。名には體が離れず、體

には名が離れぬ。是を名體不離といふのぢやと、奇怪なる説明をしてゐるものがあります。是は意味に於ても、事實に取りても、更に無分別なる、杜撰の話しと申さねばなりません。

然れば名體不離といふは、いかなることであるかといふに。是は阿彌陀如來に局る別徳でありまして。此味はひを御話しするに付いては、先づ暫く世間普通に於ける名體の關係から、説明してかゝらねば、逆も解りませぬ。凡そ世間一般何物にかゝはらず、名體不離といふものは、一物もないので。總ての物體には、元來名稱といふものは付いてないのである。若し物體に名

稱の付いてあるものならば、小供などの生れたときに、親が面倒して名稱を付けてくれる必要はありません。身體がありても名稱がないものなればこそ、親が名稱をつけてくれるのでありませう。其處で何の爲に名稱をつけるかといへば、名詮自性とていふて、自性を呼詮はす爲に名稱をつけるので、名稱を一々つけておかねば、何れが誰やら誰が何れやら混雜して、何んとも致し方はありませんから。姉はおゆき、妹はおさとと、呼詮すことに定めておくまでのことで、恰かも商人が商品に一々符牒をつけておくも、同然の理窟であります。

併し名は稱の義なれば、稱名名號と申して、必ず呼び稱ふる爲の名稱でありますから。名稱をつけるには、是非共口で呼はりて見て、呼びよい名稱をつけるといふのが、尤も大切のことであります。殊に女子の如きは、生涯實名を呼ばられてをるのが、自分の習慣であるから、可成く呼びよい名稱をつけねばなりません。拙者の知つてゐる御婦人に、せすといふ名稱の御方がありますが、此様な呼び悪い名稱では、殆んど困りてしまひます。夫につけても、難有いは、我等が後生の親様の御名稱であります。サア皆様呼ばりて御覽なさい「なむあみだぶく」。此様に

呼びよい名稱は、恐らくは世界中にありません。こゝが大悲矜
 哀の深遠なるところにして。是で助ける名號が、若し呼び悪い
 名稱でありたなら、戴く我等は泣かねばならぬ。何卒凡夫に露
 微塵難儀をさせぬやう、五劫の間だ選擇攝取したまひて。易行
 の至極を開顯し、かくもたやすい名號に、功德有丈け成就して下
 されたとは。實にく、難有いことであります。若もせずなど
 といふ御名號でありたなら、十遍も稱ふるうちに、夫こそ舌が恐
 縮してしまふのであります。

斯の如く名號といふものは、元來身體についてないものを、只
 呼詮はす爲に、假につけたまでのもので。是は人間ばかりでは
 ありません、萬の物が皆此通りで、今此御堂の柱でも、虹梁でも、私
 ははしらで御座ると、柱から名乗りたわけではない。實は柱で
 も何んでもないものには、是は柱、是は虹梁、と混雜せぬやう其品を
 呼詮はすに便利のために、一々名稱をつけておくまでのこと
 です。此故に性相の上よりいふときは、名は十四不相應の隨一に
 して。即ち名は假法である、實法と相應せぬものぢや。ツマリ
 何物の名稱でも、虚假のもので、實際の品物とは違ふてゐるとい
 ふこと。御覽なさい、此柱は、何處がはで何處がしですか。はで

もしでもらでも何んでもないものを柱々といふてをる丈のこ
 とでせう。このはしらといふ名稱は柱の實體には一向無關係
 のものであります。現在拙者の如きも松澤祐然と名けられて
 ありますが。拙者の身體は、松でも澤でも何んでもない。是が
 名は不相應といふ證據であります。此故に實際身體について
 ある目鼻や手足は、善くとも悪くとも勝手に取替ることは出
 來ねども。名稱は假につけた虚假のものですから。都合に依
 つては何時でも改名も出來又は幾何でも名稱はつけておかる
 ゝものであります。斯の如く物體と名稱とは鳥渡離れぬやう

に見へますが、其實一向無關係のもので。おゆきとつけたから
 身體が凍るわけでもなし、おさどといふ女が甘いと限りたもの
 でもない。随分辛い後家さんにおさどなんぞ、甘そうな名稱
 のついた人もあります。

次に名稱と物體は其性質上より考へても、全く別物でありま
 して。名は聲法にして耳識所縁の境。體は色法にして眼識所
 縁の境。名は耳の相手、體は眼の相手、名は聞くべき品體は見る
 べき品であります。「オヤ好いお兒さんちや子目もど口もお
 父様によく似ておいでること」夫は體を見ての話し、何程見て

も名稱は聞かねば解りません。「何といふお名稱ですか」其處で手眞似や足眞似では名稱は傳へられませんが、必ず口より聲立て。「三郎と申します」と耳に聞かせて戴くのが名稱の本性であります。今阿彌陀如來の佛體も我等の眼にこそ見へねども、眼識所縁の境である。名號は耳識所縁の境にして、聞其名號と聞いて戴く品であるから。佛體と名號とは不離どころかや丸々別物であります。

然らば何故に名體不離と申すかといふに。其處はもう一つ聞いて戴かねばならぬことがあります。餘り話しが長くなる

ので御氣の毒ぢやが、大事のところですから聞いて下さい。其譯は、眼に見ゆる物體には、力用のあるものなれども。耳に聞ゆる名稱には、何んの力用のない、といふことが動かぬ理窟でありまして。權兵衛さんの身體なら、餅も搗くが草も採る。ゴンベゴンベの名稱を以ては、餅搗力用はありません。おさんごんの身體なら、鍋も洗ふし味噌も摺る。オサン／＼の名稱で味噌の摺れやう道理はない。是は淨土眞宗で、かく定めたといふ話しでもなく、日本中で約束したこともない。是が諸法實相の道理にして、宇宙間の眞理でありますから、世界中此理窟にはづれ

るものは決してないのです。然るに阿彌陀如來の名號に局りては、此世界中の理窟にはづれて。光り輝く佛體の功德力用と、耳に聞ゆる名號六字の御利益とが、更にかはりのないところを、名體不離の別徳と崇め奉るところで。是を名號不思議とも、佛智不思議とも、義なきを義とすと信知せよとも、仰せらるゝ次第であります。

何んと皆様方實に不思議の六字ではありませんか。權兵衛さんの身體が餅を搗いたといふならば、何んの不思議もなければ、ごも。ゴンベ〜の名稱を以て、餅が搗けたとしたならば、夫こ

そは不思議〜といはねばなるまい。おさんごんの身體が味噌を摺るなら、當り前のことなれども。オサン〜の名稱を以て味噌が摺れたといふならば、實に前代未聞の不思議のことであります。今阿彌陀如來の佛體が、此座へ御出下されて、落る我等を助けて下さることならば、左程の不思議と思はねども。南無阿彌陀佛の御六字で、聞ゆる信の一念に。助けて救ふて浄土まで送り届けて下さるゝ。生た佛も同様の、仕事をなさる御六字の。不思議が不思議としれて見りや、自力疑心の腰もぬけ、佛智の不思議をたのみいるより外はないことであります。

一三 名體不二

上來御話し申した如く、音聲法の御六字が、生き佛け同様の御徳のあることを、名體不離と申しますので。是を聖教の上よりいへば、名體不二といふてありますが。名體不離といふ言葉は、聖教にはありません。然らば何故に不二といはずに、不離といふたかと申せば。不二が悪いから不離と改めたといふのではなく。西山の生佛不二の安心に、まぎれぬやうに、不二といふべきところを、不離々々と云ひ慣はしたまでのこと。不離とい

ふても不二といふても、其意味に於ては更に別はない。併し實際に於ては不二といふた方が、却りて御話しがよく解ります。不二といふは、讀んで字の如く、二つでないといふこと。然らば一つであるかといふに、左うでもない。一つのものなら初めから、名體一と申しませうが。不二といふた裏には、不二といふころがあるので。名號と佛體とは一つでもなく、二つでもないといふのが、名體不二の味はひであります。サア一つでもなく二つでもないといふては、甚だ怪訝いやうですが。是が實に彌陀の別徳で、飽まで聞いて戴きたいところであります。

先づ一つでないといふは前にも御話し申した如く。名號は耳で聞くもの、佛體は眼で見めるもの、聞ゆる聲と拜む佛と、一つであるべき譯はない。我々も名稱と身體は丸々違ふゆゑ、名と體と不一といふ點に於ては、彌陀も衆生も同じことであります。然るに其名と體とが二つでないといふのが、阿彌陀如來に局る別德で。其聞ゆる六字と拜む佛と、品は違へど價値は寸分かはらぬので。其價値の點よりいへば全く二つでない。佛體に千圓の價値がありとすれば、名號にも千圓の價値があるといふやうな譯で。西方淨土の佛體に、光明無量と壽命無量の御徳があ

れば。今爰に聞ゆる御六字にも、光壽二無量の御徳がある。生て光りた御佛に破闍滿願の功德があれば、稱へらるゝ御六字にも、破闍滿願の功德がある。相のまします佛體に、願と行とを持つて御座れば、形のない名號にも、願と行とが具足してある。彼尊の御身に往相還相の廻向があれば、此御六字にも往還二種の廻向がある。親様の御體に、落る衆生を抱き上て下さるゝ力用があれば、親様の御名稱にも、落る私を抱いて助けて下さるゝ力用がある。是を名體不二の別德と申します。譬へて申せば、錢と紙幣とは不一不二。錢は金銀銅で作られた

もの紙幣は紙で拵へたもの。全く違ふた品なれども、金貨百圓の價値も、紙幣百圓も同じことで。品質からいへば一つでない、價値をいへば二つでない。是を今日の學生さんの言葉でいへば、佛體イクオル六字。名號イクオル光明。金貨イクオル紙幣といふ代數式が出来るといふもの。ツマリ紙幣を持つたも、金貨を持つたも同じことゝすれば。生きた佛に御逢ひしたも、名號六字を聞信したも、更にかはらぬ御利益とは實に靈妙不可思議のことでもあります。

吹けば飛ぶやうな僅かの紙に、百圓とかゝれてあれば、金貨百

圓と同様に仕用はるゝは、どうした譯でせう。紙に金貨のこもる理窟はなけれども、こもる理窟のない紙に。價値をこめて通うさせて下さるゝは、天皇陛下の法律の約束がありたればこそでせう。今影も形もない御六字に、生きた佛の功德なんどがあらう道理はなけれども。あらう道理のない御六字に、生きた佛の功德をあらせて下されたは、彌陀の本願の御約束がありたればこそ。陛下の法律の廢れぬ限りは、日本中何人が持つてゐても、金貨同様に通用するのが紙幣である。今彌陀の本願の動かぬ限りは、法界中誰が戴いても、生きた佛も同様に助けて下さるゝが六

字の御力用である。ツマリ佛が六字、六字が佛々と六字が同様の力用のあることを不二とも不離とも申し奉るところであります。

然ればかゝる尊き圓融至徳の御六字を。實に聞不具足とは申しながら、今日まで六字は聞きもの稱へもの御恩報謝の道具として。信心と御助けを、六字の外に尋ねて来たことの勿體なやと改悔懺悔が出来ましたら。視ひて御覽胸の中、何はなくとも親一人。聞へた六字が御座るもの、是で安心是で往生。親に抱かれた身の樂さ、此機彼機の世話いらす、歸悦歸税の大安慰忘

れて暮すしたからも。親のすがたがこひしくは。いつも逢はるゝ御念佛。今日一日と勵みつゝ。波風あらし世渡りも。勇み勇んで、つとめあげ。近付淨土を待ちけるのが、信決定の身の仕合せである。

一四 拜む佛と聞ゆる佛

今日は雨天のところ能こそ御集り下さいました。後生知らずの人々には、彼方方の今日御参りなされた相が、何んに見えるでせう。「あの人、が又ぞろ今日も参りたよ、何度聞いても變りた

話しがあるでなし、此雨の中難儀して參るとは、除りのことに物好き過る丸で狐付きも同様ぢや」といはれるでせう。夫も致方はありません、まさか狐は付いてをらねども、佛が付いて御座ればこそ。人の參らぬ其中を出さして貰ふたことなれば。無駄に此座を過さぬやう、聽聞に心を入れ下、そこで一流安心の體は、南無阿彌陀佛に仰せらるゝに付て。この六字の名號と、西方淨土の佛體との關係が。名體不二不離といふ不思議の由れのあることを、上來御話しを致しました。此名體不二の御手柄から考へて見ると。佛體は

拜む佛名號は聞ゆる佛と申して差支はない。是は聖教の上より伺ふて見ても、儀式の上より味はふて見ても、又實際の上より考へて見ても、確かに拜む佛と聞ゆる佛のあることは、明了です。拙者に此信仰を起させて下された善知識は、曇鸞大師であります。即ち論註下卷の讚嘆門の御釋のところに、如彼如來光明智相と、如彼名義とある本論の御言葉に依て。光明と名號の二つを並べて御釋なされて。先づ彌陀の佛體より放ち給ふ光明を以ては、一切衆生の迷ひの闇を破りて下さるゝことを述べ。次に彌陀の名號にも衆生の闇を破り、而も諸願を満足さして下

さるゝ御徳が説いてある。そこで佛體の方には、光明に親しい破闇の一徳をあげて、満願の御徳を略してあるが。名號の方に、具さに破闇満願の二徳を御示しなされた。破闇の徳といふは墮さぬ徳満願の徳といふは參らせて下さるゝ御徳のことで。つまり生きて光りて輝いて御座る佛體に、落る衆生を抱上て助けて下さるゝ力用があるが。聞ゆる名號にも落る私を抱上て、參らせて下さるゝ御利益のあることを明了に御釋あそばされた。是を我祖聖人は『無碍光如來の名號と、かの光明智相とは、無明長夜の闇を破し、衆生の志願をみて給ふ』と御讚嘆下され

てあります。そこで論註の中に、一つの間答が設けてある。「問ふて曰く名は法指たり、月を指さす指の如し。若佛の名號を稱して満願すること得ば、月を指さすの指よく闇を破るべし。若月を指さすの指闇を破る能はざれば、佛の名號を稱しも、亦何ぞ満願せんや」と仰せられて、御言葉が難いで皆様には御解り悪うありませうが。名は法指たりとは、名といふものは何物の名稱でも、其品を指し詮はすまでのもので、月があららに出て御座るぞと指さして知らせるところの、指の役目も同様のものが名稱である。月さへ見つかれば、指には用事がない如く。品が

わかれば、名はごうでもよい。名は即ち假法である、然るに佛の名號同様に破闍滿願が出来るものならば、月を指さす指が、月と同様に闇を照すことが出来ねばならぬ、指で明るうなる譯がないとすれば、佛體を指さすまでに止まる所の名號で、破闍滿願の出来よう道理はあるまい、といふ御尋ねである。一口にいへば、佛體で助けるといふならば聞へてをるが、名號で助かるとは解らん話しちや、と問はせられたので。其御答へに、「諸法萬差なり一概すべからず、名法に即するあり、名法に異なるあり」と是より委しい御答へがありまして、最後のところに滅除藥の御譬

を以て結んである。此滅除藥の譬は、首楞嚴經に説いてある、世にも珍しい藥にして。此藥は何病にかゝはらず、一度服さへすれば必ず癒はる妙藥である。然るに爰に一人の重病人があり、て喉から下へは笹の葉の露一滴も通はぬやうになりてしまふた。癒す藥はありながら、哀しや服せる道がない。現今では注射法もありますが、昔は其法がなかつたで、何共致方がないかといふに。そこが滅除藥の不思議のところ、服むこと出来ん病人には、聞かせて癒す。どうして聞かせる。是れを鼓に塗るといふて、服ます藥を太鼓にぬつて、病人の枕のもとに其鼓を打つ。

そうすると病人はその滅除薬の鼓を聞いて、毒除き病癒るといふてある。そこでその薬が聲で、聲が薬で、薬服んだも、聲を聞いたも、同じ功能のあるが滅除薬。今阿彌陀如來の御不思議も、此の如しと仰せられて。光り輝く佛體を、一目拜めば忽ちに無明業障の病が癒り、即座に助かる尊き佛様である。然るに服ことできぬ重病人とは我等のこと、拜む佛があればとて、生盲闍提の明盲人、煩惱に眼さへられて、拜むことのならぬ我々は、逆も助かることは出来まいか。そこが彌陀の別徳六字の不思議、拜めぬ盲人の衆生には、彌陀の佛體の御手柄を、太鼓に塗りて叩いて聞

かす。その太鼓の役は高座の上の善知識、彌陀の佛體の御力用頼める由れと助ける利益の有丈を。ドン／＼／＼ドン／＼ド／＼と、噛んで碎いて説いて聞かせて下さる、聲が佛で、佛が聲で。高座のもとの重病人は、耳に仰せの聞へたとき、耳まで佛が来て御座る。口で六字を稱へたとき、口から佛が出て御座る。心に由れの届いた時、心の内へ御宿り／＼。何が御宿り下された、目の付いた佛でない、手足の御座る佛でない。宿りた佛の御相は、間違はさぬぞ我たのため、必ず助けるの呼聲一つ。此呼聲が御助けの名なり、體なり、親様なり。拜む佛は遠い淨土に御座れども、

夫は我等の用にはたゞぬ。聞ゆる佛は我胸に影を宿して下された六字一つの力用で。落る此身が助けられ淨土參りの身となりたのが往生一定の相である。

一五 頼む佛けは何れ

拜む佛と聞ゆる六字が不二不離にして、恰も滅除藥の如く。聲が藥で藥が聲で、佛が六字で六字が佛として見ると。佛體に逢ふたも六字、聞いたも同じことゆゑに。御文には名號を聞くといふこと、彌陀を頼むといふことを全く一つにして御聞か

せ下されてある。其名號を聞いて見ると、衆生が彌陀を頼む由れも、頼む衆生を助ける佛も、六字の中に機法一體と成就してあるゆゑに。一流安心の體は、我等の胸から出すのでもなく、西方から今更手出しをして貰ふのでもない。善知識より聞かせて戴く六字の相が全く安心の體であるぞと御知らせ下されたが御文の提撕である。

夫に就て拙者が明治三十九年の四月、越前の坂井郡に名高き河尻の性光坊へ、蓮師の御忌會に參勤したことがある。此地方は小部分ではあるが、御法義は随分盛なことで。いかにも蓮如

上人より三帖目第三通の御文を、態と賜はりた性光坊の由緒の蹟の偲ばれたことでありました。而も二十四日の晩は、群參の人々が残らず御堂に通夜をしてゐる。そこで拙者に御示談をしてくれと頼まれたで。拙者は先づ御示談の前提として、一同に改悔を上られませうと申す。異口同音に滿堂のものが御改悔文を陳べあげた様子は、仲々練習が出来てある。依つて拙者は口を開き、御一同美しく改悔をあげられたは誠に結構だ。併し陳べた御改悔文では、往生が出来ませぬぞ、陳べた心を御互に吟味して見ねばならぬ。皆様に御不審がありたなら遠慮な

く御尋ね下されと申したところが。一人の同行が、何卒尊公から一同に尋ねてやりて下されといふので。然らば拙者より御尋ねして見ませう。先づ只今の御改悔文に、一心に阿彌陀如来我等が今度の一大事の後生御助け候へとのみ申して候と陳べられたが。誠に彌陀を頼んで御座るに相違はなからうと思はれる。併しその頼まれ給ふ阿彌陀如来といふ御方は、何處に御座ると思へますかと尋ねたところ。拙者の左にゐた老母が忽ち答へて、『如来様は御佛壇の中に御座ると思ふてゐます』と申した其時同じ年頃の老婆が右より出て、『御堂に御座る佛

様と心得てゐます』といふので。拙者も此二人には殆ど恐れ入りて仕まふて、皆様どうぢや是でよいかと注意すると。今度は御堂の真中程にゐた老父が。『私の聽聞は』と少し延上りていふやう。『成程御堂の中や御佛壇にも、佛様は御座るに違ひはなけれども。我々を助けて下さるゝ御佛が、其様に澤山まします譯はない。天にも一佛、地にも一體と仰せられてあれば。是より西方十萬億の淨土に御座る、今現在の親様が御助けと戴いてをります』と申して、いかにも遠い所へ親様をやりて仕まふた。そこで拙者の目の前に聞いてゐた盲目の老人が。『成程

親様は西方に御座るに違ひはないが。其佛様が盡十方無碍光如來と申して、大空の中にも大地の底にも充滿て御座ると聽聞致てをります』と答へた。何にも大きな佛になりて來た逆も凡夫の相手にはなりそうもないと思ふてをると。そこへ七十ばかりの老婆が進みいで。『御助けの親様は私の胸に宿りて御座ると思へます』と一言に答へた。偕は火の手が近寄つて來たぞと思ひ。さあ皆様はどうぢやな、まだ變りた意見のある人はないかと尋ねたが。もふ答へる人は更にありませなんだ。何んと皆様方、佛法繁昌の土地に於て如此き聽聞の仕末とは、

實に嘆息しいことではありませんか。人数多く集まりたのが
佛法繁昌とは申されぬ。千人萬人集まりて、御忌の御通夜を賑
はしても、大事の聴聞がまち／＼では、蓮如上人は泣いて御座る
に違ひない。一つ後生を助けて戴く同行に、相手の佛が幾個出
たか數へて御覽。佛壇の佛、御堂の佛、淨土の佛、世界中の佛、胸の
中の佛、丁度五通りの佛が出来た。頼まれ給ふ大事の佛が、此の
如くに不定で、何やらかやら解らんやうな聴聞では。頼み申し
て候ふどりきんで見ても、夫こそ無茶だのみ、空頼みと申さねば
なりません。皆様は笑ふて御座るやうぢやが、餘所のことぢや

で笑ふてもをらるゝが。彼方方は何處の佛様から助けて戴い
てありますか、篤と考へて見て下さい。矢張り無茶苦茶頼みの
御仲間ではありませんか。一大事の所ですから、心確かに聞いて
下され、拙者も自分の信仰の有丈を、充分御話し致して見ませ
う。

先づ御堂や佛壇の繪像や木像様から、我々の助けて戴かるゝ
譯のないことは、皆様よく御解りでせう。助けて戴くはさてお
いて、火事でも出れば、反つて我々が御助け申さねば、焼けておし
まいになる佛様であります。かく申せばとて、繪像木像は不用

のぢやと申すのではありませぬぞ。是は御崇敬上最も大切に御給仕申さねばならぬのですが、夫は暫く別問題として。こゝで淨土に御座る佛と世界中に充滿て御座る佛といふたに付いては格別の變りもあるまい。盡十方無碍光如來にましましては世界中に充滿て御座るは素よりのことなれど。其様な廣漠のことを申しても、法性の理佛にまぎれて我々の戴く御相手には感心の話してはありませぬ。其遍照の光明も源は安養界に影現したまひた佛體より放ち給ふものなれば。餘り巧者の話しはやめにして單に西方淨土の佛體といふてほしい。そこで我

等が助けて戴く親様は、此西方淨土の佛體の外にないことは、何人と雖も動かすことの出来ぬ次第である。現に韋提希夫人は御覽なさい、其佛體を拜んで助かりてをります。併し我々は韋提希夫人の如く佛體から直接に助けて戴けませうか。こゝが一つの考へものでありますぞ。韋提希夫人は釋迦如來の加被力があつたから佛體を拜んだが、我等凡夫は何としても拜むことは出来ません。拜むことも遇ふことも出来ぬ佛體を、遠い淨土にかざりておいて安堵しやうとかゝるから、頼む一念に難儀したり、受心の詮索や、振向く思ひに稽古のいるのではあるまい

か。此邊のところは随分邪見我慢の心を離れて、よくよく味はふて見ねばなりません。

抑も阿彌陀如來の親様は彌陀は淨土にゐて衆生は娑婆において彌陀と衆生と親子の間だ十萬億の隔てをつけて助けるといふ、手緩い本願は建て、ありません。第十八願に十方衆生を助ける前に、十七願を御建て下されたことを御忘れ下さるなよ、二十三日の本願で出来た佛體で、直接に十方衆生が助けらるゝ位なら、名號成就はいらぬこと。落る衆生の苦しみより、見てゐる親がやるせなく。飛付たいとは思召せど、五十二段も違ふて

ゐては、逆も衆生に近寄ることは出来ぬゆる。世にも並びのな
い本願が十七願と十八願。生た佛の有丈が、名號六字に功德を
こめて、十方衆生諸有衆生、聞其名號の一念に、信心歡喜と宿りこ
み。即得往生の早手業させて戴く御六字に。頼む機もあり御
助けの佛も御座るとしれて見りや。佛拜んだ韋提希も、六字を
聞いた我々も、更に變りがあらばこそ。紙幣を持つたも金もつ
も、同じことなら紙幣でとる、紙幣は仕用ふに重寶ぢや。佛も六
字も同じなら、遠い佛にすぎるより、近い六字で事が足る。六字
で貰ふた仕合せは、朝な夕なに仕用れて、口へこぼるゝ稱名が、報

謝の行となるうへは、家業渡世の中からも吝まらず仕用て損はない。此世をかけて未來まで、目出度い利益の出来るのは、一流安心を戴いた信決定の身の仕合せ。

一六 證誠は六字なり

涅槃經の中に三界は安きことなし、猶し火宅の如しと仰せられて。釋迦如來が三千年の昔より、火事ぢや〜と大音あげて呼んで御座るは何の火事であるかといえ。家や倉の火事ではない、五尺の身體の焼ける火事。御覽なさい、鳥邊野の煙り絶

へるひまなく、昨日は隣の娘が焼けてしまふた、今日は向ひの亭主が焼けてゐる、ど實に恐しい火事場であります。家や倉なら焼けたあとから造り直しも出来やうが、身體計りは一度焼けたら造替の出来ぬのに。今日ちやあるまい、明日ちやあるまいと、油断してゐる其内に。無常の風が今宵にもゴト一風吹いて來たら忽ち焼けて仕まはねばならぬ、恐しい火事場にをる此身です。命のうち不審もどく〜晴れられ候はでは、定めて後悔のみにて候はんぞ、御意得あるべく候ふ。の御意見に基き急いで出離の一大事、火事の出ぬうちに要慎して、安堵決

定致しませう。

諸上來は名體不二不離の關係より説き進めて拜む佛と聞ゆる佛のあることを御話しに及び。いよく頼む佛は何の佛であるかといふことを辯じましたが。是は今更の話してはない、随分古來の學者間にも名號所歸か佛體所歸かなど、六ヶ敷い議論もあり。同行衆の中にも何處の佛を頼むのちやと心配してゐる御方もあるが。決着のところ前席に話した河尻の同行の如く曖昧として何が何やら譯解らずに御座る仕末では實に當度なしの頼みといはねばなりません。

是に依つて尙も爰の所を委しく御話しをして見ませうが。全體阿彌陀如來の御手元では既に名體不二の正覺を御取りなされてある上は。佛體でも助けて下され名號でも御助けが出来ることちやから、皆様の御都合次第で佛體でも名號でも御勝手の手よい方から助けて御貰ひなさが宜しいが。併し西方淨土の佛體は全々で我々とは境界が違ふてをるので遇ふことも近寄ることも出来るものではない。其相手にならぬ佛體を十萬億の向ふに置いて。此處で安堵しやうにかゝるから。何度頼んで見ても御助けに遇ふた形がないゆゑにツマリ係念我國

の二十の願の分際で。至心信樂己れを忘れて無行不成の願海に歸するといふ第十八願の信仰は得られぬのである。殊に阿彌陀如來が十二十三の本願で成就なされた佛體で、直接に十方衆生を助けることが出来るなら。名號成就に御難儀なされた十七願は贅物である。ソコデ十二十三の佛體の外に、十七願の名號を成就なされた、奥深き由來を伺ふて見ると。先づ御和讃の中に、『超世無上に攝取し選擇五劫に思惟して、光明壽命の誓願を大悲の本としたまへり』と仰せられて。四十八願の其中に十二十三の光壽二無量の願が、大悲の本ちやといふてある。

本とは資本のことで、資本がなくては商賣はならぬ。併し何商賣にせよ資本がありても、其資本を算司の中や座敷の隅に寝させて置いては利益が出来ぬ。百姓ならば肥料とか、呉服屋ならば反物の仕入とか、夫々商賣の品物に資本をつぎこまねばならぬ如く。今阿彌陀如來も衆生濟度の資本たる、光明壽命の誓願が出来上りても。其大切の資本をば極樂淨土の蓮華の上のみに飾りて置いて、十方衆生の代物につきこまねば、衆生濟度の利益は出来ぬ。夫も注込相手が智者や聖者でありたなら、光壽二無量の資本のまゝで取引も出来やうが。心想羸劣未得天眼の

凡夫と來ては、逆も佛體のまゝでは注込ことがならぬゆゑ。その佛體の功德有丈を、耳に聞ゆる名號、口に稱へらるゝ六字、心に持つことの出来る勅命に成就して。呼んで聞かせて攝取して、思ひのまゝの利益をせずばおかんぞが第十七の誓願である。言葉をかへていふて見れば、拜む佛の御相を、聞ゆる六字に身をやつし。十方衆生の腹底へ、至心信樂と宿りこみ、若くは不生者の本望を遂げてやらうが名號成就の目的である。

此本願を御建なされた當時に於て、空中讃言決定必成無上正覺と、早や諸佛の讃嘆が始まりたものゝ。是が我々凡夫同士の

ことならば、茶飲み話の高笑ひ。『何と妙音佛、近頃法藏菩薩の面白本願の御聞きになりたか。僅か六字の名號に、光壽二無量の功德をこめて、我々諸佛の手に餘りた、惡人凡夫を助けるとは、恐入りたる次第では御座らぬか』いかに浄光佛仰せ御尤もで御座る、生きた佛の身體をば、六字に化て衆生貪瞋煩惱中へ飛込んで、浄土へ引上げるなど、法藏比丘の目論見は、餘りのことに正氣の沙汰とは見へませぬ、コンナ無理の本願がよもや成就を致そうか』と笑ひ話をしてゐる中に。法藏菩薩は一心不亂笑は、笑へ謗らば謗れ、出来ることなら誰もする。出来ぬは承知

で建た本願無理は元より覺悟の手前。是より外に惡人助ける道がない。建た超世の本願を無にするならば我も誓ふて正覺とらじと。兆載不可思議永劫のその間だ欲覺瞋覺害覺を起さず色聲香味觸法に着せず。忍力成就の命がけ諸佛菩薩の目の前で美事立派に南無阿彌陀佛といふ本願の出來上りたが十劫の昔。ソコテ十方の諸佛は一時に腰の抜けるほど驚いて。アラ成就たアラ成就た。生きた佛と寸分變らぬ六字が成就た鬼も助かる六字が成就た。ナント不思議ナント不思議百千俱胝の劫をへて百千俱胝の舌をいだし舌ごと無量の聲をして彌陀

をほめんになをつきじ。褒て盡せぬ御手柄は聞いて助かる六字の不思議。何時まで讚嘆して見ても我等が口は閉ぢられぬと。恒沙塵數の佛達萬行の少善きらひつゝ名號不思議の信心をひとしくひとへにすゝめしむ。勸めて聞かん其時は聞かん衆生に無理はない極難信の法ぢやもの。五濁惡世のためにとて證誠護念の役廻り一切諸佛が引受て聞かせるまでは舌を引かんと總掛り。歐洲全體の騒動も元は塞耳維の事件からおさまりつかぬ戦争も一度は平和になりませう。諸佛の護念證誠は本をたゞせば十七の悲願成就のゆるなれば同勸同讚同證と、

佛境界の大騒ぎ、是はおさまる時がない。釋迦は往來八千度、往つ戻りつの御苦勞で、末世に生れた我々は。勸むる聲に攻られて、是が親様佛様抱いて落さぬ御六字が、金剛心と知れて見りや。餘りのことに驚いて、自力難行の腰はぬけ、攝取心光の捕虜となり引かれて參る往生は。さても不思議や南無阿彌陀佛。

一七 廻向は六字なり

火の話しを何程手厚う聞いたとて、身體の焼ける氣遣ひはない。水の由れを何程深く心得ても、手足は夫で濕はせぬ。然る

に阿彌陀如來の佛體の威神功德の不可思議なる讚嘆の言葉を聞いて心に届いた一念に、惡人凡夫が助かるとは、實に極難信の法である。かゝる極難信の法なればこそ、十方の諸佛は口を揃へて證誠讚嘆なさるので。拙者も及ばず乍ら十七願の位置たる高座の上に踞りたうへは、阿彌陀如來の御手柄を飽まで讚嘆して見たい覺悟であるから。十八願の位置に御座る皆様も、至心信樂の出来るまで充分に、聞明して貰ひたい。

そこで阿彌陀如來の御本願の全體を一口に申せば、與へて助けるといふ思召より外はない。與へて下さるが廻向の義助け

て下さるが攝取の義にして。この廻向と攝取は敢て別物では
 ありません。廻向せねば攝取がならず攝取せねば廻向になら
 ん、ツマリ網かけて救ひ上げるといふやうな譯で。攝取の網が
 即是其行、その即是其行の攝取の網を、發願廻向と我等凡夫に、か
 けられた形が南無歸命と顯るゝので。「網せずんばなんのおの
 れが阿彌陀かな」と誰やらの讀んだ狂句の如く。獵師の中に
 も阿彌陀如來は大獵師十方衆生殘らずに攝取の網をかけてや
 らうが廻向の願心である。是を祖師聖人は。「如來の作願をた
 づぬれば苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲

心をば成就せり」と御喜びなされ、一々の誓願は衆生の爲のゆ
 ゑなり。樂がしたうて彌陀は難儀をしたのでない、衆生に樂が
 させたい計りで此苦勞。一願發したも衆生のため、一行積んだ
 も惡人のためと。積んだ功德は山の如く、集めた善根は海の如
 し、海とも山とも譬がたない、彌陀の身代は出來上りても。是を
 淨土の莊嚴ものとしてをる丈では、大悲の胸はやすまらん。何
 卒此身代を苦惱の有情に譲り與へてやりたいと思召せども。
 何分衆生の根機がつたな過るのと、與へる功德が大きいので、
 與へる道が更にない。こゝが阿彌陀如來が一際御骨の折れた

ところである。

皆様は財産さへ出来たら是を人に與ふるには左程の骨も折れるものではあるまいと思ふて御座りては彌陀の御手柄は聞へませぬぞ。與へるにも程がありて根機相應のものならば與へることも受取ることも容易いが。根機不相應のものも来ては、逆も譲り渡しの出来るものではありません。御互ひに御存知のもので、一番大きい品物を譲り渡しのありたのは。去る明治四十三年に、韓國の帝王が朝鮮全體を、我が明治天皇陛下に御譲りなされたことでもあります。是に付いて考へて御覽なさい、

御互は田地がほしいの山林を買入れたいのと希望しては居るものゝ。朝鮮残らずを與へるぞといはれたらどうでせう、拙者は逆も受取ることは出来ません。是非共貫はねばならぬ場合になれば、拙者は夜逃にするより外はありません。なせなれば朝鮮などを下されても、拙者は三日と維持の出来ぬのみか、忽ち殺されてしまひます。彼の様な大きな田地になると、陸海軍の全權から司法權を握りて御座る其上に、萬國無比の御盛徳に在す。我が天皇陛下の御力に非ざれば、受取ることは叶ひません。是は一分の譬ですが、今阿彌陀如来より我等に下さる身代は、朝

鮮程のものでせうか。仲々朝鮮どころか五大洲はさておき十方諸佛の御淨土の身代一時に集めたより、まだ大きな彌陀の身代を。朝鮮一つでさへ夜逃にしても受取れぬやうな我々に、どうして廻向が出来ませう。廻向が出来ねば出来ぬまんまに、ホカツテ置かるゝ彌陀ならば、左程心配はなけれども。戴く我等は無心配下さる彼尊は大心配。どうしたならば下根最劣の我々に、無上甚深の功德善根を譲られやうかと思召し。爰で三世十方に並びの無い、易行至極の御六字に、二十九種の莊嚴功德を殘らすこめて。呼んで聞かせて與へて下されたが發願廻向

の御手柄であります。

可愛や一人の道樂息子、何處と居場所の定めもなく、迷ひに迷ひを重ねてゐる。我子に迷ふ親心、老先短い存命中に、身代殘らず渡してやりたいは山々なれど。家や田地が其儘持ち運びは出来もせず、去りどて遺言狀ぐらゐでは氣がすまず。何卒身代を手渡しにして仕まひたいの考へより。家も田地も諸道具も殘らず銀行へ打込んで、百萬圓の手形を振出して貰ひ。親類のたしかの人に其手形を持たせて、息子の行末を尋ねて廻らせた。そこで息子は道樂の果てに病み患ひ、獨り苦しんでをる

ところを尋ね出したる親類の人。こりや息子殿お前の親より預りた手形を爰で渡しますぞと懐中へ投込まれた一枚の紙。これはと息子は手に取りて、よく見れば百萬圓の爲替手形。届いた時が家も田地も諸道具も、一時に我物になりたとき、是さへあれば大丈夫と戴いた時が助かりたとき、助かりた時がたのまれたとき。頼まれた時が安堵のとき、安堵の時が嬉しいとき、夫は一念同時である。

今阿彌陀如來の親様は三界二十五有生に何處と居場所の定めなく、迷ひ苦しむ私に。身代残らず手渡しにしてやりたい

と思召せど。莊嚴が莊嚴のまゝでは譲られず、功德が功德のまゝでは與へられぬゆる。淨土の功德莊嚴の有丈を、振込んで下された銀行が十七願。その十七銀行より振出されたが南無阿彌陀佛の六字の手形。親類の諸佛菩薩に手形を持たせ、後生一つに病み患らひ困り果てたる私を。尋ね出して、こりや衆生大悲の親の下されもの、是をお前に渡すぞと、耳の底まで投込んで下されたが六字の手形よく聞けば安價い六字であればこそ、願行具足の百萬圓、是で不足はなかつた。信せられたる其時が親の身代を貰ふたとき、貰ふた時が助かつたとき、助かつ

た時が頼まれたとき。歡喜も安堵も決定も一念同時に出來上り往生一定御助け治定平生業成不來迎自力を捨てる疑ひ晴れる一心歸命二種深心。言葉の數は山々でも仕事がいろくあるでない。六字一つの御廻向で残らず満足して見れば。なんぼ道樂息子でも病み患ひは仕方もないが。受けた御恩へ對しても此上非道はせられまい。假令煩惱具足でも妄念妄執の起るのは仕方がないとして見ても。念佛申す口ちやもの御恩の重い此身ちやもの相形に顯はして無理は出來まい非道はすまない。王法仁義を初めとし親子兄弟夫婦中下女や下男に對して

も主人ぶりして無理するな。我身は家來と思ふても大悲の親の一人子で未來に取りての兄弟なら。なさを掛けて使ひたて、淨土參りの道連に貰ふた六字をわけてやり。共に御慈悲を喜ぶが御恩報謝の經營である。

一八 攝取は六字なり

先年名古屋の或同行が拙者へ申しますには。「是迄他力くと聞かせて貰ふてをりまして、今迄の他力は誠に難儀の他力でありましたが、今度はいよ／＼世話のいらぬ他力の味を戴

かせて貰ひました」と述べるので、偕も驚いた尾張の名物は、大根計りと思ふたに。さすが中京だけありて難儀の他力といふ珍しいものが、名古屋にはあるかと感じたことがありました。さあ今日御集りの御方の中にも、此難儀の他力といふ御仲間はありませんか。純粹の他力に難儀のあらう筈はないのに、他力他力といひ乍ら、心で難儀をしてをるが、夫が自力の證據です。獨りで行くのが十九の願、是は仲々骨が折れます。親に連れられて行く形、ちが二十の願、何の苦勞はないやうでも、連れられて行く分際では、まだ多少の世話もいります。併し攝取心光と、親

に負はれて參る第十八願には、露微塵苦勞のあらう筈がないのに。又しても頼む一念がわからんの。信心がどうも戴けぬのと難儀して御座るのは。夫が他力の届かぬ證據でありますから、爰暫らく頼む手元の御話しはあとにして、頼まれたまふ親様の他力の御手の届くまで、聞て／＼聞き明して戴きたい。其他力の御手と申すは、因力果力本願力佛力のこと、是を我等に届けて下さるゝが發願廻向。其發願廻向と御與へ下さるゝに付いて善根が善根の儘では届けられず、功德が功德の儘では與へられぬゆゑ。さても易行の至極たる名號六字に萬善萬行を封

じこめ。いかな思かな女人でも、受取り易い持ち易いやうに、御成就下されたが南無阿彌陀佛の廻向であることを、前席に委しく御話し申しました。夫に付いて餘り諄いやうではあるが、拙者に二つの話しをさせて戴きたい。

その一つは明治三十六年の春、越後三條別院の本堂再建中に於て、石材請負金の残額四百八十圓を仕拂ひましたところ。此金額は既に債權を譲渡せられてありたので、夫が問題となり諸橋某といふ債權者より、訴へ出されたことがある。尤も是には別院に於ても、相當の理由がありたので、黑白を法廷に争ふ

ことも出来たのぢやが。何分別院の住職は宗制寺法に定められた通り、御法主が御住職で御座らせらるゝ爲に。法廷に於ても御法主の名義で争はねばならぬが、いかにも残念である。殊にごちらが敗ても、御互に控訴するといふ場合になると。理に勝ても費用に負るといふことは、随分世間に例のあることなれば。別院の役員初め、本山の重役も見えて、相談の結果。此金額は不法の請求としても争はずして渡してやることに決定し、何月何日に仕拂ふ旨を原告に通知してやりました。いよ／＼當日となり其金額を仕拂ふ役が、其當時再建事務所に使はれてゐ

た拙者の方へ廻りて来た。此坊主仲々の癖者で、現在二重拂ひをする此金額、おめく渡すが、いかにも残念。何とか悪戯がしなくなり、先づ銀行へ金を引出しにゆき、銀行で持て餘してをる銅貨四百五十圓を、小使二名に荷車を以つて別院まで送らせた。尙三十圓の不足は、一厘錢を繩に繫いだ別院の賽錢を以て是に充ることに用意調ひ、待つ間程なく原告の代理人として、某辯護士が見えました。早速對面所へ通し拙者は一應の挨拶をして、受領證は御持参ですかと尋ねたれば、彼は手鞆の中から、正式の受領證を差出した。拙者は夫を受取りて、是で宜しい然らば

金子を御渡し申しますと、小使に命じて彼銅貨を運ばせた。封は切れる袋は破れる、ゴロくザクく、座敷の一方に銅貨の山をなした。そこへ蛇を繫いだやうな一厘錢が三十束。是で四百八十圓が揃ひました、御改めの上御受取を願ひますと突出せば。さすが辯護士も驚いて、是は誠に困りました、何卒紙幣と御引換を願はれまいかと頼むので。拙者は大喝一聲、それは出来ません、受取る彼方が困るより、仕拂ふ此方は猶困る。不徳極まる原告の請求、御氣の毒なは彼方の商賣。金さへなれば何なる不徳の使ひでも、厭はず御出下された、受取る金は重いはず。重

いが厭で御座るなら罪滅ぼしになるやうに、残らず寄附しておしまひなされ遠慮なしに戴いて上ませう。拙者は是で御免を蒙りますと、其座を立つてしまひましたが。後に残された辯護士は、進退實に谷まりて泣くく、小使に頼みいり。旅店まで其金を運んで貰ひ、漸く仕末をつけたことがある。

もう一つの御話しは、同じ三條別院で、明治四十三年の夏御門跡様の御駐錫中。いよく九月の十一日に、御遠忌志を完納するやう、駐錫事務所より仰せ出された。そこで各受持員も夫々奔走奨励したが。拙者も其一員に加へられ、某地方を受持つて

九月十日の夜迄に三千五百圓計り集まりました。紙幣の種類も數々で、殊に厄介なのは銀貨雜貨が三百圓餘りある。是には殆ど閉口して、某銀行に頼みいり集金残らず爲替手形にして貰ひ。是を懷中して十一日の晝頃寛々別院へ歸りて見れば。駐錫事務所の司計さんの前に、各納金者が黒山の如く立ちかゝりてをる。司計さんも目のまはる程難儀して御座る、何分雜貨取混幾千圓づゝ持參して來てゐる勘定が、一人すむにも容易でない。そこへ拙者も飛出して、司計さん拙者の納金も願ひますといへば。君は午後にして貰ひたい、何分此混雜では仕方がないとい

ふ。いや拙者の納金は、左様に面倒はいらぬのぢや、唯是一枚ですと爲替手形を差出せば。夫なら早速受取りてあげませうと、人先納金を済ませたことがある。

つまらぬ話して皆様を退屈させ申して、御氣の毒であります。こゝらで篤と味はふて見て下され訴へ出しても取らねばならぬと、鬼になりてかゝりて来た御客でも。銅貨計りで渡されては、僅か四百か五百でも勘定するの日に日が暮て、持も運びもならばこそ。然るに阿彌陀如來は、五百や千の話してない、萬善萬行無量の功德を。一つ／＼に御渡し下されては、百千萬年懸

りても、我等は逆も戴くことは出来まいに。幾千圓の大金でも爲替にすれば、何に混雜の場合でも、受取り渡しは直ぐ出来る。不可稱不可説不可思議の量り知られぬ功德でも、聞き得る信の一念に、煩惱具足の我々が受取り損じのないやうに、御成就下されたが六字の爲替の廻向である。

爰に一つの心配は、折角彼尊の身代を六字の爲替に成就して、發願廻向と御與へに預かりても。戴く我等が散亂龜動の放逸者であるゆゑに、戴いて見ても忽ち振捨てしまふたり、失ふて仕まふやうなことでは、何度與へても所詮がない。何卒一度與へ

たら、決して失はぬやうに、衆生に持たせておきたいものであるが。併し散亂放逸の衆生に、持つてをれどは甚だ無理ぢや、是は彌陀が落さぬやうに、持つてゐてやるより外に道はないと思召し。彼尊の光明攝取の御力用を六字の中に封じこめ。聞かせて與へた御六字で、離さず逃がさず攝取して、捨てざる力があればこそ、阿彌陀と名けたてまつる手足や身體で抱ことならぬ可愛衆生を我彌陀は、名を以て物を攝すとあるからは。聞いた我等は忘れても、聞こへた六字は油斷なく。護りごほしであればこそ。懈怠にくらす下からも、信行共にうるはしく。相續の出

來る有様は、南無阿彌陀佛の御力である。

一九 光明は六字なり

拙者は幼少のころ、御和讃や御文を拜讀して、心のうちに思ひますには。何でも我々の方に、疑ひ晴れて一心に彌陀を頼んだとき、西方淨土の如來様が、光明を放ちて攝取して下さるので、是を御和讃には、『金剛堅固の信心の定まるべきをまちえてぞ、彌陀の心光照護して』と仰せられ、御文などで戴いて見れば。『何のやうもなく一筋に、此阿彌陀ほとけの御袖に、ひしとすが

りまゐらする思ひをなして、後生を助けたまへと頼み申せば、此阿彌陀如來はふかく喜びましゝて、其御身より八萬四千のおほきなる光明を放ちて、其光明の中に其人を攝めいれてをき給ふべし。』とあれば、衆生の頼み心の起らぬうちは、如來様も攝取して下さらぬことゝ心得て、大きな方角違ひをしてをりましたが。皆様の中にも、此様な考へ違ひをして御座る御方はありませんか。若し阿彌陀如來が事實其様な御方でありたなら、何たる偏屈佛で御座るか、わからんことになりますぞ。皆様もよく考へて御覽なさい、今日此座に此の如く、幾百人と御集りな

されてある其中に。そこら當りに踞りて御座る御一人が、先づ信心を戴いて、頼む一念が出来たとしますか。そこで阿彌陀如來は御油断なく、早速大光明を放ちて、其人丈を攝取下されたは結構なれど。其人の右にをる人も、左にをる人も、前の人も、後の人も、總て光明の外に出してをきなさるといふことになる。實に偏屈の如來様と申さねばなりません。なせなれば、折角光明を放ちた序ちやもの、たとひ眞實の信心は戴けてなくとも、仇や敵であるまいし、前後左右の人々位は、光明の中にいれて下されてもよい譯ではありませんか。併し光明が小さくて、逆も

一度に五人も十人も攝められぬといふならば。夫こそ頼みにも力にもならぬ光明であります。何程の衆生でも攝め取るゝ大光明であるならば。頼んだ衆生丈は攝め取るが頼む一念のないものは光明の中へ入れられぬなど、吝嗇な話しはやめて貰ひたい。拙者は先年水害慰問に奔走したとき、某所で船を仕立て出掛けやうとする所へ、四五人のものが來かかつたから。向ふへ渡る用事があるなら、拙者の船に御乗りなされと申したれば、皆々喜んで乗りました。拙者はどうせ仕立た序ぢやもの、五人や三人乗せてやる位は何でもなかりた。此精神から考へ

て見れば、拙者が阿彌陀如來様になりたどすれば、此御堂で一人のむ者がありた時には。どうせ八萬四千の大光明を放つ序の仕立船五人や十人はさてをき御堂中の人々を殘らず攝取してあげたいと思はるゝ。然るに大慈大悲の如來様が可愛我子を助けるに、頼む一念があれば攝取する、夫がなければ光明の中へはいれられぬとは、偕も解らん親様である。子供を負んだ婦人が參詣して信心を戴けば、負はれた子供は氣の毒や光明の外にして、負んだ婦人丈けが光明の内住ひか。夫ではいよく阿彌陀如來は、偏屈佛吝嗇佛と申さねばなりません。

併し阿彌陀様には此の如き偏屈のあるべき譯はゆめ／＼な
けれども。我々凡夫の聞き様に意外の角違ひの偏屈をしてゐ
るものゆゑに。頼み心に氣兼をしたり歡喜や報謝に賣僧心が
やまぬので。悲しいことには何時まで聽聞はして見ても生涯
光明の中へ入つたか入らぬかわからずして。頼み心を頼み
にし、是で往生と定めては見ても、人にいはれぬ腹底に。是で光
明の内住ひかしらんといふ、頼み少い心地がとれぬのである。
然れば其偏屈の聞き様とは、いかなる點かと尋ねれば。前にも
委しく申した如く、彌陀と衆生と相談して、定める後生と心得て、

六字を相談の文句と誤り。我等が頼めば彌陀が御助け、頼む一
念がないならば、たとひ彌陀でも助けられぬと。大悲の親様を
馬鹿にして、頼む心も助ける法も、六字の中の御由れといふこと
を忘れてゐるから。偏屈の聽聞に墮入て、他力の味がわからん
のぢや。

抑も阿彌陀如来の御手元に、光明攝取の御力用は勿論あるに
相違はないが。夫を我等が手元へ戴く時は、光明が光明のまゝ
に届くのではない。必ず耳に聞ゆる名號にして届けて下さる
ので、御和讃の中には、『光明てらしてたえざれば、不斷光佛と

名けたり、聞光力のゆへなれば、心不斷にて往生す。と仰せられ
是を懇に御知らせ下されたが御文様。三帖目第二通を御覽
なさい。『次に阿彌陀佛の四字はいかなる心ぞといへば』と四
字を確かにおさへなされ、是が彌陀の御身より光明を放ちて、助
けて下さるゝ生佛の力用が、此阿彌陀佛の四字であるぞと御示
し下されて。其阿彌陀佛の御助けが、此機に届いた形ちが、南無
と頼む信相なるが故に、四帖目の六通には、『その頼む心といふ
は』と頼まれた有様を顯はして、『卽是阿彌陀佛の衆生を八
萬四千の大光明のなかに攝取して、往還二種の廻向を衆生に與

へまします心なり。されば信といふも別の心に非ず、みな南無
阿彌陀佛のうちにもりたるものなり』と仰せられて、ツマリ
善知識の御取次下さるゝ、六字の名號攝取の力用ある品なれば
六字が光明々々が六字にて、参りて御座る人々には、依估も偏頗
もあらばこそ。一味平等に六字の光明は届いてをれど、耳には
つかり聞流し、六字の外に信心と御助を尋ねまはりてゐたゆへ
に。今日まで安堵も出来かねて、難儀の他力であつたのちや。
いよく、只今といふ只今は、六字の手柄に目がさめて、是が親様
佛様。光明攝取も發願廻向も、名號六字であつたかと、信せられ

たる其時が。落る此身が此儘で落さぬ親に遇ふた時。親に遇はせて貰ふて見れば頼むまいぞといはれても頼む思ひはたゞ起る。起た思ひの有丈が此方の世話であらばこそ頼まれて頼ませ給ふ親様の。六字一つの力用で安堵決定と顯はるゝことゆゑに、一流安心の體は南無阿彌陀佛の六字の外にはないぞよと、御示し下された次第である。

二〇 信心は切符である歟

「聞きたびに珍らしければほとゝぎす、いつも初音の心地とぞ

すれ』。都て我身の熱心に好むことになる、何度同じことを重ねても厭ふ心は起らぬもので。不如鳥を樂むものは、何度聞いても其度毎に、いつも初音の心地がする。源の俊頼朝臣が讀まれた唯今の歌であります。法敬坊も、九十まで存命候に此年まで聽聞申し候へども、これまで存じたることなし。あきたりもなきことなりと申されてある如く。今は不如歸どころの話しかや、我身が佛になる由れぢやもの。どうぞ皆様あきたりもせず聞明かし、得心の出来るまで聽聞に心をいれて貰ひたい。

二〇 信心は切符であるか

偕て是迄は一流安心の體、南無阿彌陀佛の六字なりといふに
付いて。六字一つのはたらきに、廻向も攝取も御助けも、悉く
こもりてある。萬行圓備の嘉號なるがゆゑに。其御助けの御六
字が、此機に届いた一念に、此方から出す信相ではない。届いた
六字のはたらきで、雜行も捨たり彌陀も頼まれ、自力も離れ安堵
も出来ることなれば信心といふも安心といふも、全く六字の外
にないことは、充分に御話しを致しました。

然るに世間には、兎角信心と御助けを離してしまひ。信心で
御助けを引付けるか、信心と御助けを交換するやうな考へを持つ

て。稍もすると此信心安心を、汽車や汽船に乗込むときの切符
に喩へて話す人があります。其喩への大要をいふて見ると、汽
車に乗るには切符がある、切符がなければ汽車には乗れぬ如く。
御助けの汽車に乗込むには、必ず信心の切符がなければならぬ、
たとひ切符を持つてゐても、自分の手拵ひの切符や、方角違ひの
切符では間に合はぬ。是非共御上から出して下された切符に
して、而も京都へ行くなら京都の切符。奈良へ行くなら奈良の
切符と、間違ひのない品でなければ通用は出来ぬ。たとひ信心
はあるにもせよ、其信心が凡夫自力の手造や、十九二十の信心で、

化士行の切符では眞實報士の往生は叶はぬ。此故に祖師聖人も眞實信心一つにてと仰せられて。自力の僞物では間に合はぬ。必ず他力廻向の眞實の信心を戴かねばなりません。サア御同行衆、その信心があるかないか。そして戴いたと思ふ其信心が、若も自力の信心や、十九二十の方角違ひの信心ではないか。こゝが肝要の吟味の仕場であるぞと演べるのである。

此喻へは一應聞けば御尤も至極で、何んの間違ひもないやうであるから。拙者も随分此喻へを高座の上へ持出して、御話し申したこともありますが。再應深く考へて見ると、ごうも此喻

へでは淨土眞宗の信心安心に合はぬやうな心地がする。尤も譬喻一分といふから、ごこか肝要のところが一分析法に合へば、夫ですましてをかるゝが。信心を切符に喻へて仕まふては、一分どころか全分合はぬのみならず。或意味より考へて見ると、機法一體の眞宗の正意を損なふのみならず、如何にも狂氣の沙汰と申さねばならぬことがあるやうに思はれる。是に依つて拙者は自分の信仰の有丈を、是より御話し申して見ますから。何卒皆様も虚心平氣に御聞き取下されて、萬一拙者に間違ひがあるか、又は皆様に落意せぬ點がありましたら。御遠慮なしに拙

者に御聞かせを願ひたいことであります。

二一 切符を持って乗後れ

そこで若し信心が切符のやうなもので、御助けが汽車の如しとして見ると、幾多の不審が起りて来る。先づ第一には信心の力用を失ひ、第二には機法一體の道が立たず、第三には大悲深重の親を損なふ、其他にも種々の間違が出て来るが。先づ初めに信心の力用を失ふといふは。信心が全く汽車に乗る時の切符のやうな譯ならば、信心の切符を戴いた丈では往生が叶はぬこ

とせねばならぬ。信心丈で往生が出来ぬとすれば、往生はいまの信力によりて御助けありつると仰せられた御言葉が虚になり、信心の力用がないことになる。皆様よ御呑込みが出来ますか、定めて出来ぬ御方もあります。『サテ松澤は實に奇怪の事をいふものかな、間違のない切符さへ持つてゐたならば、誰でも行かるゝ譯であらうに、信心の切符がありても往生が出来ぬとは、いかにも妙ぢや』と思召す御方もあります。切符では逆も行かれませんか、行かれますか、ためして御覽。停車場へ行つて間違のない切符を懐中にいれて、是さへあれば行かる

二二 切符を持って乗後れ

と安堵して御座られても。汽車が来ぬなら行かれますまい、たとひ汽車が来ても油断して乗後れたら是も行かれませんか。皆様よ、今日まで信心を切符のやうに考へて、毎日〱御座の停車場へ信心の切符取りに御出なされ、是が助けたまへの一念である。是が頼まれた信心に相違ない。確かに信心の切符を握り、誰に見せても誰に聞いても、間違のない信心ぢやもの。是さへあれば大丈夫と思ひこみ、大事の汽車に乗りたか乗らぬか、御助けに遇ふたか逢はぬかを分別せずして。生涯信心の切符を握りて、御座の停車場で居睡りして御座るのではあるまいか。

「汽船出てゆく煙りはのこる、残る煙りは癪のたね」と笑ひ文句に聞き流してはをれませんが。汽船出てゆく我身はのこる残る我身は地獄行き。えらい騒ぎになりますよ。此様な切符握りの同行が世間に澤山あるやうに見えますが。前にも委しく申した如く、是が一念、是が後念と、信心の切符は確かに握りて見ても。大事の御助けに遇ふたか逢はぬか、汽車に乗りたか乗らぬか、解らぬものゆゑに。無事で平氣で喜んでをらるゝ時は何んの苦もないやうではあるが。サア出掛る臨終を取りつめてみるときは、何んとなく心細い心地がして。人にいはれぬ

心の底に、是で間違はないかしらんと、又もや切符の詮義にかゝり。御化導に照して考へたり、同行同士に尋ねて見たり。偕こそと其場限りの安堵はしても、又もや是で間違はあるまいかと。生涯確かの思ひになられぬのは、御助けの汽車に乗らずして。信心の切符計りを握りてゐて、仕まひに落る證據である。

二二 切符持たずに飛乗り

第二に信心が切符で、御助けが汽車ならば。切符と汽車は全く體が違ふてをるから、確かに機法二體になる。機法が二體で

あるならば、切符を受取りた時と、汽車に乗込んだ時と、どうしても別とせねばならぬ。夫では一念歸命の道がたゝぬ。併し是には一念同時と理窟をつけて見ても、頼んだ時と御助けの時とは一念同時といふ内に、前後次第が付いて來ねばならぬ。説筆に次第のあるは仕方もないが、事實一念の内に前後が分らるゝものならば、決して一念とは申されぬ。信心や安心は理窟できまるものではない、實際からよく味はふて御覽なさい。汽車に乗るには切符がいるとは、夫は一應の理窟をいふてゐるまでのことで。實際よりいふて見ると、切符はなくても汽車に乗りさ

へすればゆかれます。時としては間違ふて乗りたのでも、乗
さへすれば汽車は必ず連れてゆきます。拙者などは年中のう
ちには、切符持たずに乗込むことが間々あります。皆様も弘誓
の船に乗込むに、切符がいるなど考へてゐずに、まあ乗込んでお
しまひなされては如何です。聖徳太子は何んど仰せられまし
た。「急げ人彌陀の御船のかよふ世に、切符を出して早ふ乗込め」
そんな仰せではありません。「乗後れなば誰か渡さん」。行つて
も行かんでもよい所なら、一汽車ぐらゐ乗後れても、切符を取つ
てゆるくと二番汽車で御出なさるもよからうが。此汽車で

行かねば間に合はぬといふ場合に於て、切符の沙汰をして御座
るは愚痴の限りといふものです。此度び乗後れたら、極樂参り
の二番汽車はないのですから、切符の沙汰はあとにして大至急
乗込んで仕まふて戴きたいのであります。斯申したら皆様の
うちには、成程切符はなくても乗りさへすれば行かるとに相違
はないが、其様のことをしては、必ず罰金を取られませうと仰
しやる御方もあらう。是は御尤ものことですが、今日では車掌
さんにことほりて乗込めば、罰金は取られませんが、先年まで
は切符がなくては、どうしても増金を二十錢取られました。行

かんでもすむ所ならいざしらず、此度参らねば無量永劫参れぬ
淨土ぢやもの。罰金ぐらゐを恐れて御座るは氣の毒ぢや、早く
御乗りなされ。拙者は車掌の役を勤めて、切符なしに御乗
りなされたことを證明してあげますよ。そして罰金は先方へ
着してから取らるゝのでありますから。切符なしに乗込んで
も、極樂へ行つてしまへば。阿彌陀如來の親様は、待つてゐたぞ
よ能う来てくれた。衆生のための罰金なら、千萬兩でも吝ま
すに。出してやるぞと仰しやるから。切符持たずの其儘で、早く
飛乗りなさるが何よりであります。

二三 切符は狂人の沙汰

第三には切符がなくては乗せられぬといふやうな話しにし
て見ると。眞實大悲の親様を丸で無茶苦茶にして仕まひます
ぞ。總て切符があるといふやうなことは、營利業にこしらへた
汽車や汽船のいふことで、ツマリ錢を出して乗るものに限る話
しである。切符などいへば皆様は、別物のやうに思ふて御座
るやうであるが、彼れは錢を拂ふた證據に渡すまでのものであ
ります。たとひ金錢を出さずに乗る船でありても、切符がある

といふならば。客に擇びのあるときのこと、乗せられる客と、乗せられぬ客の隔てのある場合である。無賃の乗合船や親が仕立て迎ひによこした船に乗込む場合に於て、切符がいらう譯はありません。

抑も阿彌陀如來が、大願弘誓の仕立船御成就下された思召は、迷ひの衆生を乗せて渡して駄賃をとりて。夫で淨土の活計をつけ、残りがありたら十方諸佛と利益配當を致さうといふ、株式組織の弘誓の船ではありません。可愛衆生の獨り子ちや迎ひとりたい親心より態と仕立て成就して。さしつけられた船ち

やのに、乗込む衆生に切符がなければ乗られぬ杯と申しては實に大悲の親を損なふて仕まふことになりませぬぞ。

皆様よ篤と味はふて見て下さい。いとし獨りの娘子を、木曾川の向ひに縁付てある。今日は實家に花見の宴子供を連れて来る筈ぢやが。僅か河一本のことなれど其處に渡船がないために。上へ廻れば一里半、下へ廻れば二里もある。そこで母親が心配し、下男の權七に申付け、船を仕立て娘のもとまで迎ひにやりた。娘は大いに喜んで、是は權七ようこそ迎ひに来てくれた、さらば是より参りませうと。子供を連れて荷物を持たせ、河

の岸までやつて來た。そこで權七船をどこのへ、サア姉さん靜かに乗りて下さいといへば。娘は急にうろたへ出し、袂や懐中手風呂敷、あちらこちらと尋ね初めた。様子や怪しむ權七は姉さん何んぞ御忘れ物でもありませんか。『いや何んの忘れ物はなけれども、切符がなくて困つたよ』。ナント皆様こゝまで行つては實に狂氣の沙汰と申さねばなりません。今は大悲の親様が可愛衆生の獨り娘、淨土の花見に招きよせたいは山々でも、僅か三途の河一本に隔てられ、上へ廻れば死出の山下へ廻れば三僧祇。三毒五欲の手荷物に罪や障りの子供を連れて、難儀する

のを氣の毒に思召し。五劫永劫仕立船善知識の御使ひで、乗せて渡すの御迎ひに。あづかりた娘が此私し、乗込む一念の場合に於て、切符がいたるとは恐入りたる次第である。

こゝで面白い云ひ譯する人がある。成程他力すくめの弘誓の船ちやから、錢を出したり心配して、求めるやうな切符は元よりいらうかや。南無と頼む切符まで、大悲の親様より御廻向下さるゝことなれば、衆生のかたには何んの御世話もいらぬのぢや。と曰せておけば、勝手次第の話しが出る。いらぬ切符の遣場がなくて、大悲の親に罪をさせ、切符まで親様より下されたと

は何事である。娘を迎ひにやる親が舟の外に切符までこしらへて先づ娘に切符を渡し、夫を受取りたら乗せて来い、若切符を受取らなんだら、空舟で歸れといふのか。夫では親の方が氣違になりませぬぞ。舟で迎ひにやる外に、切符まで添へてやる必要がどこにありませんか。皆様よ大概のところに御呑込がしてほし

い、此度の往生には確かに切符はいりませぬぞ。
然らば弘誓の舟に乗込むには信心がなくともよいといふのか。一寸御待ちよ。拙者は切符はいらぬと斷言したが、信心がいらぬとは未だ一言も申しませぬぞ。切符はいらぬが、信心は

必ず要ります、信心がなければ淨土往生は出来ません。こゝが肝要のところですから、次席を待つて聞いて下さい。

二四 乗込んだが南無

引續いて御話しをさせて戴きますが、此度弘誓の舟に乗込むには、決して切符はいらぬといふことを前席に委しく御話し申しました。然らば信心がなくともよいのかと、疑ひなされる御方もありませうが、信心がなくては淨土参りは出来ません。信心が在るといふならば、矢張切符が在るのであらうと後戻り

なさる。困りたものぢや。一度信心を切符のやうなものぢやと思ひこんだが病根で。切符がいらぬといへば信心までいらぬかと驚き。信心が在るといへば切符が在ると妄想し。果しのつかぬ聽聞では大事の未來を仕損じますぞ心靜かに聞いて下され。淨土眞宗の頼む一念の信心といふは切符のやうな譯ではありません。九の裸の此儘で乗せてやるその弘誓の舟に。乗彼願力之道と乗込んだ一念を信心といふのです。乗込んだものでなければ行かれる譯はないから乗込む信心は必ずあります。乗りたが南無の二字乗せたが阿彌陀佛の四字。客から

いへば乗りたといふ船からいへば乗せたといふ。乗りたと乗せたと言葉に左右はあるけれど、仕事が二つあるのでない客が乗りたといふは船が乗せたこと船が乗せたといふは客が乗れたこと、乗りたと乗せたは一つこと。そこで機法一體といはるゝので南無といふ二字は客が船に乗りたこと。阿彌陀佛といふ四字は、乗りた御客を船が乗せたこと。客が乗りた相の其儘が船が御客を乗せた相船が御客を乗せた相の外に客が船に乗りた相はないゆゑに。二字が即四字四字が即二字といはるゝのぢや。子供が親に抱かれた相が南無の二字、親が子供を抱い

た形ちが阿彌陀佛の四字。子供からいへば抱かれたといふ親
 からいへば抱いたといふ。抱いたと抱かれたは機法一體で。
 南無と衆生が彌陀を頼んだといふは阿彌陀佛が衆生を助けて
 下されたこと。阿彌陀佛が助けて下された其儘が衆生の頼ま
 れた信相で。頼んでから助けて貰ふのでもなく、助けて貰ふて
 から頼むのでもない。頼んだとは助かつたこと、助かつたが頼
 まれた形ち。客が乗りてから舟が乗せるのでもなく、舟が乗せ
 てから客が乗りたのでもない。乗りたまんまが乗せたのちや、
 乗せたまんまが乗りたのちや。そこで當流の頼む一念といふ

は親ならば抱かれた形ち、舟ならば乗り込んだ相た。阿彌陀如
 來ならば助けて戴いたことを、信の一念と申すのである。

偕皆様いよ／＼御助けの舟の外に信心といふ別の切符がい
 るのではなかりたことが、明瞭に御得心が出来ましたか。此度
 の弘誓の舟は切符いらすの只ですよ、呂波ちやロハ／＼。只で
 乗り込む舟であるから、皆様の内に是さへあれば大丈夫と、要ら
 ぬ切符を握つて御座る御方があつたら。其切符を今日限り御
 捨なさい、サア／＼早く御捨早く御捨。誰も御捨なさらぬか子、
 成程永年かゝりて、漸どこのことに握りつめた切符ちやもの。た

とひ不要として見ても、ソ一は急に手離しは出来まいが。手離し出来ぬ切符なら、無理に離せとは申しませんが。切符を握りたばかりにして、船に乗り込んで下さらんでは大變ぢやゆる。今日は其切符を握りたまゝでも宜しいから。確かに船に乗り込んで仕まふて戴きたいのであります。皆様はいかゞですか。

二五 乗せられたが他力

成程よくわかりました。切符を持つてゐても、乗らねば行かれぬ、弘誓の船には切符はいらぬ、乗りさへすれば行かるゝ道理。

その乗り込んだ時が南無と頼んだ形ちと聞けば、乗り込む一念が大事に違ひない。然れば其弘誓の船にはどうして、乗込めばよいのですか。

皆様はいよゝ切符持たずに、乗込む氣になりて下されましたか、夫は難有い。併しどうして乗ればよいのぢや、と御聞きなされるが、抑自力の耳の立てやうである。當流は乗るのに違ひはなけれども、其實は乗せられるのです。此邊が大事の聞きどころ。自分の方から、どうして乗つたらよからうと、乗込む工夫をする人は、手足がきくか、腰が立つか、兎も角も自己に力のあ

る人でなければ叶はぬ譯。盲目で覺で腰拔で、おまけに大病煩ふてをるものとして見ると。どうして乗りたらよからうの思ひも斷へた話しになる。今日の皆様や我々は、落ることや沈む事ならいざしらず。佛になるの極樂へ參るのといふ問題になりては。智慧の眼目はつぶれはて、戒行の足腰はぬけて仕まい、八萬四千の煩惱の病人でありながら、どうして乗るとは鳥澁がましい。『生死の苦海はとりなし、久しく沈める我等をば、彌陀弘誓の船のみぞ、乗せてかならず渡しける』。乗込む世話をやめにして、乗せて戴く他力船。乗るのが自力、乗せらるゝが他力。

そこで乗せられる、乗せられた、といふラレの二字が、いかにも他力至極を顯はす言葉にして。祖師聖人も、彌陀の誓願不思議に助けられ、參らせて、往生をとぐるなりと仰せられて。此助けられ、參らせてとある、ラレの二字を能く吟味して御覽なさい、雞が籠の中へいれられた。雞は何も知らずに餌を拾ふてたべてゐた。そこへ主人が大きな籠を以て来て。ソイツと鳥にかぶせたので、もう鳥は逃ることは出来なくなりました。さあ是が鳥の智慧や分別で、籠にはいりたのではない、一から十まで主人の計らひたつた一つで、籠にはいつたのぢやゆるゑに。他力を顯

はすそのときは鳥が籠にいれられたといふのである。子供が蚊帳にいれられたといふも同じこと。子供の方では永の一日遊び戯むれ疲れ果て夕飯の御膳のねきに睡りてしまふた。夫を見付けた母親は、オヤ坊が睡りたよと自分の喰る箸放て、立つて行つたは寝間の中。床をのべたり蚊帳をつり用意萬端調へて、睡れる我兒をドッコイと両手かゝへて抱き上げ。ア、坊が重くなりたよ重や〜と、小言いふのか喜ぶのか親の親切に運ばれて蚊帳の中へ寝せられた。子供が蚊帳へはいつたに違ひはないが、其蚊帳へはいるといふ問題に付いて、子供の工面や願

ひは少しもいらん。残らず親の手際計りで、はいつたのちや故に子供が蚊帳へはいつたといふよりは、他力を詮はず場合に、は入れられたといふ方が明瞭である。此様の御話しは幾何並べても同じこと。今日在座の我々も、弘誓の船に乗込むには、自分の力があるでなし、自分の世話がいるでなし。他力づくめに計らはれ、乗せられるのちやと知られたら。どうして乗りたからよからうと、自力の相談やめにして。どうして乗せて下さるか、と尊方の手元へ耳を傾けるのが、他力の聽聞と申すものである。

二六 呼ばふてのせ給ふ

そこで阿彌陀如來は、どうして我等を弘誓の船にのせて下さるゝやといふに。さても不思議の乗せかたをして下さるゝので、其傳授は御和讃の中に、『彌陀觀音大勢至大願の船に乗じてぞ、生死の海にうかみつゝ、有情を呼ばふてのせ給ふ』と仰せられてある。此御和讃は、一應は誠に解り易い御話しのやうであるが、再應考へて見ると甚だ解らんことがある。其譯は、彌陀觀音大勢至は御助けの人、大願の船が御助けの法、生死の海は我等

の迷界。そこで海中に溺れてをる人を、助け船に救ひ上げて下さるゝことに譬ての御聞かせであるから。いかにも明瞭のやうではあるが。有情を呼ばふて乗せ給ふといふに至りては、種種の不審がある。先づ第一に、溺死するものを救済するといふ場合に於て、急に船をさしよせずして、向ふにゐて呼ばはりて御座るとは、餘りに暢氣の話ではあるまいか。第二には、溺れた人が其呼聲を聞いて、難有いと思ふても、嬉しいと思ふても、何んの所詮はないことで。事實船の中へ引上げて貰はねば、助かることは出来ぬのちやとして見ると。呼んで御座るがいよゝ